
新たなるエトランジェ

六壬式盤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新たなるエトランジェ

【Nコード】

N9956Q

【作者名】

六壬式盤

【あらすじ】

世界を渡る力を持つ混沌の永遠者。その1人に戯れの主役として別世界にとばされた主人公。彼の人生はこの先どうなるのか……。はじめまして、六壬式盤です。

このたび、友人が投稿したのをきっかけに私自身も挑戦することにしました。

この小説は、とあるエターナルの戯れでゼロ魔の世界にとばされた一般人である主人公がくりひろげる物語です。

作者はアニメでしかゼロ魔を知りません。後、作者の独自解釈がい

くつかあります。

処女作ですので目標は完結させることです。

誤字・脱字などがありましたらご連絡ください。

プロローグ（前書き）

はじめまして、六壬式盤です。

このたび初作品を投稿することになりましたが、作者は文章表現力等いろいろたりないため誤字・脱字などがありましたらご連絡ください。

プロローグ

ここはとある世界の森の中。その森に一人の男がいた。男は抜き身のバスターソードを背負い、手には日本刀を持っている。

「これで準備は整った。後は俺の目的のための駒を舞台に上げるだけだ」

男は石造りの建物を見たままそう言った後、男の前に光の輪が現れ男はその中に消えていった。

暗い空に日の光が入り明るくなり始めたころ、俺は境内に出る。

「そんじゃ、やりますか」

冬の寒空の下、俺は白い息を吐きながら親戚が神主をしている神社でお世話になるかわりに手伝いをしている。俺が手伝っているのは境内の掃除だ。境内の掃除といってもこの神社はそれほど広くないから楽だ。

ちなみに何故親戚に世話になっているかというと、俺の通っている高校は実家から通うには遠いからだ。

1年も続ければある程度慣れてきて、今日の晩飯は何だろう等どうでもいいことを考えながら掃除を終えて戻ろうとしたときに男の人

が神社前の階段を上ってきた。

「そこのお前ちょっと待て」

参拝客だろうと考え、軽く挨拶して戻ろうとしたところでその人から声をかけられた。何だろうか？と思いつながら振り返ると20前半で170cmの俺より少し背の高い男が近くまで来ていた。男は黒のマントで全身を覆っていて背中にも布でぐるぐる巻かれた何かを背負っている。はっきり言ってもものすごく怪しい人物だ。

「お前名は何と言う」

「上代流ですけど貴方誰ですか？俺に何か用ですか？」

こんな怪しい人に知り合いはいはいはすなんだけどな

「我のことはどうでもよいが暴君とでも名乗っておこう。それよりお前、これを持って」

こつちとしてはどうでもよくないんだけどな。なんて思いながら差しだされた物を見ると竹刀袋だった。何故見ず知らずの男にこんなm「なにをしている！さっさと受け取れ！……相手の勢いで受け取ってしまったけど、この人自分で暴君を名乗るだけあってむちやくちやだな。

「しっかり持ったな。ならば行って来い」

受けとった物が何なのかを確認しようとしたが暴君の声が聞こえた瞬間、軽い耳鳴りと足元が光始めた。

「なんだ！？おい、あんた！これは何なんだよ！！」

「わめくな。たんに俺の目的のために貴様という駒を別世界に送るだけだ」

「ふざけるな！人を駒とか何様のつもりだ！」

光が強まるにつれて周囲の音が聞こえ辛くなるが、気にせず暴君に対して怒鳴る。

「強者が……をど……ようが……の自由。強……ある……戯れで……を弱者……強者になる……を与えて……のだ。せいぜい俺を楽しませてみる」

暴君が言い終わると同時に光が強まり俺の意識は落ちた。ほとんど声が聞こえない状態だったが、最後の部分だけははっきりと聞こえた。

「強者が弱者をどうしようが強者の自由。強者である俺の戯れで前を弱者から強者になる機会を与えてやるのだ。せいぜい俺を楽しませてみる」

言い終わると同時に門を開いてやつを例の世界に飛ばす。やつがあの世界で早々に退場されてはつまらんが、クツクツクツあれだけ騒げるのならそう簡単にはやらねえだろう。今はそんなことよりも

「遅かったな。時深」

「……間に合いませんでしたか。今度は何を企んでるの。暴君」

入口から現れたのは俺と同じエターナルの時深だ。奴の力自体はたいしたことはないが、奴の未来を視る力は面倒だ。

「なにを思ってあの子を飛ばしたのかは知りませんがあなたが危険すぎる。ここで倒させていただきます」

「倒すとは大きくでたな。できるのかお前に」

「確かにマナの濃い世界なら難しいでしょうが、マナの薄いこの世界なら互角に戦うこともできます」

確かにマナで体を構成している俺達エターナルにとってマナの薄いこの世界では、存在することは出来るが力を使うことができるほどではない。軽い身体強化や門を開くことは出来るが、大きな力が使えないためいつものようにはいかないだろうがそれでも負ける気はまったくない。

「せいぜいやってみるがいい。無駄だと言うことを教えてやろう」

俺が構えると同時に時深は直刀型の神剣を構えて迫ってくる。1
テンポ遅れてこちらも突っ込み、射程内に捕らえて『暴君』を振り下ろした。

プロローグ（後書き）

基本、主人公設定等は本文中に表現するように心がけていますが、それでもよくわからないという人は書いてもらえればネタばれにならない範囲でお教えします。

これからもよろしくお願いします。

第1話（前書き）

この作品を読んでくださっている読者の皆様へ。

このたびは自分の決めた投稿期限を大幅に過ぎてしまつてすみません。m (´・`・´) m

こんな作者ですがこれからよろしくしてもらえるとありがたいです。

第1話

草の匂いと土の感触がする。重い瞼を開いて体を起こす。どうやら森の中に倒れていたみたいだ。

頭がぼんやりとして何があったのかいまいち思い出せない。確かいつも通り学校に行く前に境内の掃除をして、ちょうど終わった時にだれか来て…っ！そうだ！あの男が何をしたのかは知らないけど、光に飲み込まれる時に耳鳴りと頭痛のせいで気を失ったんだ。

(ここはどこだ？ 神社に森はなかったはずだし)

それに今は冬のはずなのにさつきから生ぬるい風を感じる。これは、冬の風じゃない。

(そういえば、あの野郎が投げ渡してきた物はなんだったんだ？)

倒れていた場所のそばには、暴君が投げ渡してきた竹刀袋があった。拾って中を確認すると、ライトブルーの鞘に収まっている柄と鍔が黒い一振りの日本刀が入っていた。何故暴君はこの刀を俺に渡したのか？俺に何をさせたいのか？いくつも疑問に思うが、今は何故だかわからないがこの刀が気になってしかたがない。なんとなく袋から取り出して眺めていると

「貴方が新しい契約者ね」

突然女性の声が聞こえてきた。聞こえたと言うよりも頭に直接響いてくる感じだった。突然の事に驚いて辺りを見回してみるのが誰もいない。

「どこを見ているのですか？私は貴方の手元にあるではありませんか」

また声が聞こえてきた。しかも声のぬしは俺の手元にあるという。

「まさかこの刀なのか」

「ようやく気付いてくれましたか。先程から声をかけているのに全然気付いてもらえないんですから」

ありえないと思いつつも確認したのだが、どうやらさっきから聞こえていた声のぬしはこの刀のようだ。

「それでもう一度訪ねるけど貴方が契約者ね」

「俺は刀と契約なんてしたことないぞ。それよりもお前は一体何なんだ。暴君は俺になにをした。ここはどこなんだ」

暴君が渡してきたこの刀ならなにか知っていると考え、いまにも声を荒げてしまいそうになるが、それを抑えておちついて質問する。

「無視しないで欲しいのだけどまあいいわ。先に質問に答えましょう。と言っても私が答えられるのは1つ目の質問だけ。他は私にもわからないわ」

「わかった」

一番聞きたいことが聞けないのはつらいが、この森を抜ければ此処がどこなのかわかるだろうし大丈夫だろ。とりあえず暴君は次に会ったときに1発ぶん殴る。

「私は永遠神剣第六位『護り』。契約することで契約者に力を与え
る存在よ。そして貴方は私の契約者になることができるのよ」

「永遠神剣？それっていつたいなんなんだ？それに何故俺なんだ？」

「私達永遠神剣は何本もあってそれぞれが意志をもっているわ。
剣と言っても形状は剣以外にもいくつもあるわ。そして私達と契約
することで契約者は大きな力を得ることができる。もちろん誰とで
も契約できるわけじゃないし誰もが私達の声が聞こえる訳じゃない。
それで神剣にも力の位があつて一番下の十位から始まって位が少な
い方が強い。ここまではいい？」

「大丈夫だ。けどお前の位が六位ってことはそれほど強くないのか」

「それは神剣同士が戦う場合よ。神剣を持つ者と持たない者では、
力の差がありすぎてそもそも戦いにすらならないわ。例えるなら、
十位の神剣でも1人で国を落とすこともできるほどよ」

正直な話、一番下でも1人で国が落とせるなんて規模がでかすぎ
ていまいち実感がわかない。けどなおさら俺がこいつの契約者にな
れる理由がわからない。

「それで何故貴方なのかだけど、さっきも言ったように強弱がある
けど神剣は意志をもっているわ。意志が弱い剣はほとんど本能だけ
のようなものだけど、意志が強い剣ははっきりとした目的というか
願いをもって契約するわ。私もそれと同じことよ」

「ちなみにその契約はすでにおこなわれているのか？」

「まだ契約はしてないわ」

それは正直助かった。自分の知らないうちに契約とかされてもただ迷惑なだけだ。

とりあえずここがどこなのか確認するために移動しようとしたとき、遠目にだがこつちに近づいてくる人影のようなものを見つけたので道を聞くために近づいていった。

俺は見つけた人影に向かって歩いて行きながらこの神剣をどうするか考えていた。家に持って帰ったとしてもおじさんとおばさんに隠しとおすのは難しい、かといって今更どこか適当な場所に捨てるのも気が引ける。というか暴君は神剣の事を知っていたのが気になる。知っていたのなら何故、俺に渡してきたんだ？……

そんなことを考えているうちにあと数分程で人影の姿を捕らえることができそうな距離まで来たとき、突然耳鳴りと頭痛がおこり足が止まった。

「くっ、突然なんなんだよ」

突然のことで足が止まったが、向こうからもこつち来ていたため次第に相手の姿が見えてきた。が俺はその姿を見て自分の目を疑った。豚のような顔、醜く太った体、大きさは多分2メートル程あり右手にはところどころ突き出た棍棒を持っていて、まるで豚が2足歩行しているようだった。

「なんだよあれ」

「そんなことより早く逃げなさい。今の貴方じゃ簡単にやられるわよ」

その言葉を聞いて固まっていた俺は急いで別方向に逃げようとしたが、時すでに遅く豚の化け物はこっちに向かって走ってきていた。すぐさま逃げるが、朝食を抜いたことや此処まで歩いた疲労のせいか思った以上に速度が出ず、化け物との距離も少しずつだが縮んでいるような気がした。

「はあ。はあ。くそお、振りきれねえ」

「私と契約しなさい。そうすればあれを倒す力を与えることができるわ」

こんな状況になっても俺はまだ契約することを迷っていた。

「もし、助けが来るなんて考えをしているのならその考えは捨てなさい。今でも相手との距離は縮まっているんですよ。体力が落ちれば走る速度も落ちて、さらに距離が縮まります」

「そんなことは言われなくてもわかってる。けど、契約したらお前の願いとやらを叶えないといけないんだろ」

俺が気になっているのはそこだった。いくら人ではないとはいえ、力をくれるのに願いを叶えることができなかつたりするとなんか悪い気がする。

「そのことなら心配しなくていいわよ。願いの内容は契約してからでないと言えないけど、よほどのことがないかぎり叶えられないなんてことにはならないからあまり気にしないで大丈夫よ」

「……わかった。お前の言うとおりのままだといずれ追いつかれ

る。契約のしかたを教えてください」

「簡単なことよ。ただ貴方が契約する意思を見せてくれるだけ。そしてその意志は確認したわ。我は永遠神剣第六位『護り』今ここに汝との契約は成立した」

『護り』が言い終わると身体の中から暖かい力があふれてくるのが感じられ、『護り』の使い方がなんとなく理解できた。このまま逃げ切ることもできそうだけど、もしあの化け物に誰かが襲われるかもしれない。そう考えるとなんか気分が悪いし、あの化け物はここで倒す。

「そうね。私と契約したんだから、こんなやつは瞬殺よ。我が主」

「っ！なんで考えてることがわかったんだ！それになんだよ我が主って」

「後で説明してあげるわ。それよりお客さんが来たわよ」

契約したときに足を止めていたため『護り』と話しているうちに、相手はすぐそばまで迫っていた。

相手は走ってきた勢いのまま棍棒を振り下ろしてきたので、後ろに飛んで避けたのだが、周りの景色がすごい勢いで流れいったかと思うと突然背中に衝撃がはしった。なにがあったのか確認するため後ろを見ると、木があったのだがぶつかっただであろう場所が割れていた。契約したときから体が軽くなっている感覚はあったが、これほどとは思っていなかった。

その力に驚いたが気を取り直し『護り』を抜いて構える。『護り』の刃は刀身70cm程で鞘と同じライトブルーだった。相手が再び突撃してくるのに合わせてこっちも接近し、棍棒を振り下ろしてく

る瞬間加速して右肩を斬り飛ばし、すぐさま反転して確実に倒すために後ろから首を斬り飛ばした。

化け物を倒した後、その場からだいぶん離れた場所に移動した。葉っぱ等で血を拭き取り、鞆におさめた『護り』から契約したときに感じた疑問を聞くために場所を移した。

「それでなんで俺の考えてることがわかるんだ」

「契約は魂に刻まれるから。主にわかるように説明するなら、主の意識と私との間に契約による繋がりができて私が主の意識を共有しているから」

「俺にプライバシーはないのか。後、主は恥ずかしいからやめてくれ。俺の名前は上代流。流で頼む」

「わかったわ。ところでこれからどうするの？」

「とりあえずこの森から出て人が居る所を探さないとな」

今がだいたい昼ごろだから夜になる前に人に会いたい。そう考えながらさっきの場所とは逆の方向に歩いて行った。

途中で見つけた木の実などをつまみながらしばらく歩いていると、教会らしき建物の屋根が見えた。人が居ることを期待しながら少し急ぎ足で向かおうとしたとき、

「キヤアアアアアア!!!」

突然教会の方から女の人の悲鳴が聞こえてきた。悲鳴の聞こえた方を見ると、女の子が先程俺が遭遇した豚の化け物に襲われていた。化け物は、ちょうど手に持つ棍棒を振り下ろそうと手を挙げていたのが見えたので、全力で跳んで盾を出すために護りの力を集中させる。反対側にいた4人の男女がいて水色の髪の小柄な女の子が、おそらく彼女を助けるために手に持っていた杖のような物から氷柱を飛ばしてきた。

そのことには驚いたが、速度を落とすことなく跳んでいく。全力をだしたことで、丁度振り下ろし始めたばかりのところまで女の子の前に降り立ち、護りの力で出現させた楯『オーラフォトンシールド』を張ることができた。

足元に円形の魔法陣のようなものが広がり、目の前に足元にあるのに似た円形の楯が現れる。展開されたシールドに棍棒がぶつかるがシールドは揺らぐことなく相手の攻撃を止める。そこに先程の氷柱が脇腹辺りに刺さって相手が怯む。

そのすきに、盾を消して後ろにいる女の子を抱えて4人の傍に跳ぶ。

俺の名は平賀才斗。前まで普通の高校1年だったけど、今では地球とは別の世界で伝説の使い魔ガンダールブなんてのをやっている。そんな俺は今、学園のメイドであるシエスタの故郷に向かう途中で宝探しをしていたキュルケ達に付き合わされることになった。場所は森の中にある寺院なのだが、そこにはオーク鬼いわゆる豚の化け物が巣くっていた。そのためオーク鬼を一掃することになってし

まった。

作戦はシンプルな物でキュルケとタバサの魔法で外におびき寄せ、落とし穴までオーク鬼を誘い出し出した後キュルケとタバサ、キュルケの使い魔のフレイムで殲滅するというものだった。皆が木の上に隠れ準備が出来る。

「なあデルフうまくいくと思うか？」

「さあな。けど悪くないと思うぜ相棒」

俺がこの世界で手に入れた相棒デルフ。こいつはインテリジェンスソードと呼ばれる喋る剣デルフリンガー略してデルフだ。

それでキュルケとタバサの魔法でオーク鬼を外におびき寄せせるまではうまくいったのだが、外に出たオーク鬼にギーシユのワルキューレが襲いかかっていた。

「ギーシユの野郎勝手なことしやがって！いくぞデルフ！」

「おつよー！」

ギーシユの勝手な行動の後、キュルケ達も各々が別々に動いているのを見て俺もデルフを抜いて応戦する。

「なに勝手なことしてるのよギーシユ！作戦が台無しじゃない！」

「あんな作戦がうまくいくとは限らないだろ。戦いは常に先手必勝。僕はそれを行動にしたまでだよ」

オーク鬼の殲滅が終わった後、みんなが集まる中キュルケがギーシュの独断行動を咎めているんだが、ギーシュはまったく反省していない。

「戦いのたの字も知らないうえに勝手に突っ込んだ拳句、ワルキューレはすぐにやられたくせによく言っわよ！いい、ラ・ロシエールでも言ったけど、私達はあなたより戦闘経験が豊富な。あの作戦で全部倒せるなんて思ってないわよ。けれど、落とし穴に落ちた分相手の数が減ってもっと楽に倒せるの。そこのとこわかってるの！」

いまキュルケが言ったように独断先行したワルキューレはオーク鬼に突撃したのだが、少し怯ませることしか出来ずすぐに倒されてしまったので、実質ギーシュのしたことはただ足を引っ張っただけなのだ。

「とりあえずシエスタを呼んで中を調べようぜ」

オーク鬼を倒す間、シエスタには危険だから離れた場所にもらっていた。キュルケとギーシュもまだ言いたりなさそうだったが、落ち着いてくれてシエスタを呼ぼうとしたとき、

「キヤアアアアアア！！」

シエスタの悲鳴が聞こえてきた。慌ててそっちを見ると、オーク鬼がシエスタに向けて棍棒を振り下ろそうと手を挙げてるところだった。それに気付いたタバサが魔法を放ち、俺もデルフを抜いて駆け付けようとしたが、すでに棍棒は振り下ろされようとしていた。

「シエスタアアア！！」

叫んでも状況は変わらないが叫ばずにはいられなかった。俺もタバサの魔法も間に合わない。そのことに絶望しかけたとき、突然シエスタとオーク鬼の間に男の人が割り込んできた。

誰かが割り込んできたのには驚いたが、その後には起きたことはさらに驚いた。その人が割り込んですぐに、その人の足元に円形の魔法陣のようなものが現れたと思ったなら、その人の目の前に足元と同じような物が現れてオーク鬼の攻撃を止めていたからだ。オーク鬼が再び攻撃をしようとしたとき、タバサの魔法が脇腹辺りに当たって体制を崩すと、その人はシエスタを抱えて俺達のそばまで跳んできた。オーク鬼はタバサが追撃に放った魔法で倒した。

それを見てからシエスタを助けてくれた人に目を向けると、その人の服装が神社で働く男性が着ている服だった事に驚いた。

襲われていた子を近くにいたおそらく知り合いであろう男女のところへ連れてきたのはいいんだが、助けた子は気絶して4人も氷柱を出した子は杖をこっちに向けて警戒しており、残りの3人は驚いた顔をして動かない。

ここにいるメンバーもよく見るとおかしい。助けた黒髪のメイド服を着た女の子、同じ黒髪で青のパーカーとズボンを着て背中に剣を背負った男の子、ここまではまだいい。けど残りの3人、服装は3人とも同じで白のカッターシャツにズボンとスカートを着てマントを羽織っている。これもまだマントが謎だけど、どこかの制服で納得できるけど、金髪の男の子に赤い髪女の子、青い髪にメガネをかけた小柄な女の子と毛色が違いすぎる。

「そんなことより、その子を安静にした方がいいんじゃないの？」

「そういえばそうだったな。なあ、あんたらこの子を休めたいんだがどこかないか？」

「は、はい！それなら寺院の中に寝かせましょう。みんなもそれでもいいよな」

いち早く回復した黒髪の男の子の声でほかの2人も回復して中に入ろうとしたとき

「待つて。あなたは何者」

青い髪の子に杖を突きつけられた。

「この子を安静にしてから話をしないか？こつちもいろいろと聞きたいことがある」

「……わかった」

少し考えていたが、杖を下してもらえたので寺院の中に入り埃を掃った机に女の子を寝かせて、俺達は隣の机に集まった。

「まずは自己紹介でもするか。俺の名前は上代流。日本Z「上代さん！！それ本当か！！あんた今日日本って言ったよな！！」って！おい、どうした落ち着け！」

互いに名前がわからないと不便だと思い、名前と年齢、外人もいるから日本人であることも話そうとしたら、突然黒髪の男の子に問

い詰められた。

気絶していた子も問い詰められている間に気がついて、そのおかげでようやく落ち着いてもらうことができた。

「落ち着いてくれたところでさっきの続きだが、そっちの名前も教えてくれ」

「ああ、さっきは悪かった。俺は平賀才人、才人でいい。こいつはデルフ。さっきはシエスタを助けてくれてありがとう」

「俺様がデルフリンガー様だ！よろしくな！」

「私はキュルケ。キュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストー。長いからキュルケでいいわ。この子は使い魔のフレイム」

「僕はギーシュ・ド・グラモン。そして僕の使い魔ヴェルダンデさ」

「……タバサ…シルフィード」

「私はシエスタです。先程は危ないところを助けてくれてありがとうございます」

才人の背中にある剣、デルフが喋った時はあれも永遠神剣なのかと思いましたが、『護り』によると違うらしい。それはそれで驚いた。

「それで才人はなんであんなに興奮してたんだ？日本人ってことに反応してみたんだけど、言葉が通じるってことは此処は日本のど

「こかだろ」

そう言った途端、才人が見てわかるほどに落ち込んで、周りの全員にこいつ何言ってるんみたいな顔をされた。

「俺はなにかおかしなことで言ったか？」

そんな言葉に才人が顔をあげると、真面目な顔をしてとんでもないことを言ってきた。

「流、落ち着けて言う方が無理な気がするが落ち着いて聞いてくれ。…此処は日本どころか地球ですらない異世界なんだ」

……は？何言ってるんだ？ここが異世界？冗談だと思って才人を見るが、いたって真剣な表情を見て冗談ではないことがわかった。

（なあ『護り』。才人の言ってることって本当なのか？）

「可能性は高いわよ。流が起きた時と起きる前ではマナの量が違いくすぎる。マナについての説明は後にするけど、流が起きる前にいた場所はマナが希薄だったのだけど、起きた時つまり此処はマナが豊富な。もちろん此処が豊富なかだけってこともあるけど、異世界って言われた方が納得がいくわ」

才人が冗談を言ってるわけではないのがわかってても、信じたくなかったから『護り』に聞いてみたが、結果は才人の言ってることを肯定する内容だった。

それを理解すると虚脱感が湧きあがり、1人になりたくて才人達に断って寺院の外にでた。

話しているうちにだいたい時間がたったようで、空は夜の帳が見え始めていたが俺の意識は一か所に固定されて動かなかった。そこには赤と青の2つの月があり、いやでも異世界だということを実感させられた。

家族や友達とはもう会えない。これからは住む場所もなく食べるものも自分で何とかしないといけない。異世界なら字や文化も違うだろう。さっきみたいないな化け物とかが、うろろろしているかもしれない。いくら『護り』があるといっても、そんなところであたの高校生が生活していくことなんかできるはずがない。

そんなことを考えると悲しみより、こんなことになる原因である暴君に対しての憎しみが湧きあがってくる。

「あの、食事の準備ができたんですけど、いつしよに食べませんか？」

声のしたほうを見るとシエスタがいた。これからのことを考えていても、この世界のことを知らないことにはどうするのかを決められないし、食事と聞いて空腹感も感じられた。シエスタの好意に甘えてついていくと、寺院の裏手にある少し開けた場所に焚火を囲んでいる才人達の姿が見えた。

食事を終えた後、寝床は才人達が張ったテントを共に使わせてもらえることになり、見張り番を交代ですることになりギーシュ、俺、才人の順に決まり今は俺の番だ。焚火の火を消さないように時折枝を入れながら、食事のときに教えてもらったこの世界のことを整理することにした。

この世界というか星に名前はなく、人の住むハルケギニア大陸、同じく人の住む浮遊大陸アルビオン、エルフという種族の住む砂漠地帯、その砂漠の更に東にあるといわれているロバ・アル・カリイの3つに分かれている。ハルケギニア大陸はトリステイン王国、ロマリア連合皇国、ガリア王国、帝政ゲルマニアの大国といくつかの独立国に分かれていて今いる場所はトリステイン王国らしい。

この世界には魔法があつて、魔法を使える貴族と使えない平民に分かれている。

キュルケ、タバサ、ギーシュの3人はトリステインにある魔法学院の生徒で、宝探しのために授業をサボってきたらしい。シエスタはそこで働いており、今回は才人についてきたらしい。それで才人に関してだが、もとは俺と同じ地球に住んでいたらしいが、好奇心で目の前に現れた不思議な鏡のようなものに触れたら、吸い込まれ気がつけばこの世界で使い魔をやる羽目になったらしい。

才人の主人である人物も魔法学院の生徒らしいが、今はちょっとしたいざござのせいで喧嘩中らしい。だいたいこれくらいか。

(そういえば『護り』。さっき言ってたマナについて教えてくれな
いか)

「構わないけどえらく突然ね。さっきまでこの世界でのことを考えていたんじゃないの」

(急に思い出したんだからいいじゃないか。1人で考えるより、誰かと話でもしたほうが眠気もなくなるだろうし)

「わかったわ。マナは世界によってその量は違うけど世界に必ずあるものよ。マナは私たち永遠神剣にとって重要なもので、神剣は力を使うためにマナを使用するわ。だからマナの少ないところではあ

まり力を使えず、逆にマナが豊富なところでは力をフルに発揮できるの。ここまでで何か聞きたいことはある？」

（つまりそのマナっていうのは力を使うためのエネルギーってことなのか）

「そうよ。流が出した楯も、マナを使用しているわ。それから、これはマナの話とは違うけれど、癒しの力といっても今はまだ痛みを和らげる程度だけどその力は流にしか効かないから注意してね」

？何故俺だけ？力を使いこなせていないからか？それともマナを使うための神剣を持っていないからか？

「どちらも違うわ。流にしか効かないのは、単に流以外体をマナで構成された人がいないだけ。マナで構成された人が他にも見つければその人にも効くわよ」

「ちょっと待て！体をマナで構成ってどういうことだ！俺しかいないってどういうことだよ！」

寝ているみんなを起こさないように、『護り』との会話は心の中でしていたが、今のは声をあげても仕方がないと思う。幸いにも誰も起きてこなかったが。

「言葉通りよ。流の体は心以外、つまり皮膚・肉・骨全てがマナによって今の体を構成しているの。だからマナを使った癒しの力は、体を構成している傷ついたマナを補うからマナで構成された流にしか効かないの。もちろん他の生き物にもマナはあるけど、それは微妙たるもの。流の構成量を99としたら普通の生き物は1あるかないかよ」

俺の体は「おーい、流。交代に来たぞ」他とは違う。なんで「おーい。流？聞こえてるか」俺だけなんだ。

「流！！」

「っ！？ああ才人がどうしたんだ？」

「どうしたはこっちのセリフだぜ。さっきから声かけてるのにボイとしてよ」

「すまん。考え事してた」

俺が普通とは違うことを知ったら才人はどう思うだろうか。変わらずに接してくれるだろうか？それとも怖がるだろうか？

「流。あなたの体がマナで構成されていてもあなたは人よ。ちょっと特別なだけでそれ以外は普通の人とは変わらないわ。今日はいろいろあつて疲れてるだろうから今日はもう寝なさい」

（わかった。ありがとう『護り』）

「それじゃ才人。後は頼むよ。お休み」

「おう。お休み」

才人に後を頼んで2つあるうちの片方男性用のテントに入る。3つ敷いてあるうちの未使用の毛布をとって横になる。思ってた以上に疲れが溜まっていたのか横になってすぐ眠気が襲ってきた。

(お休み 『護り』)

「 ええ。 お休み流」

『護り』に挨拶をして俺は意識を手放した。

第1話（後書き）

もし読んでいる途中でこれはおかしいと思うことなどがありましたら、ぜひともお教えください。

第2話（前書き）

お久しぶりです。六壬式盤です。

今回も前回以上に時間がかかってすみません。

そのことで、後ほど後書きでこの作品を読んでくれている皆様にアンケートのようなものをしています。

第2話

一夜明けた次の日。朝食時に才人達からこのまま宝探しに参加しないかどうかを提案され、これからどうするかを考えていなかったため、お言葉に甘えてついていくことにした。現在は、シエスタの故郷タルブの村にタバサの使い魔シルフィードに乗って向かっている。

目的はかつてシエスタの曾お爺さんが乗ってきたと言われている『竜の羽衣』なのだそうだ。シエスタの話では、メイジ頼んで固定化の魔法をかけてもらうほど曾お爺さんが大切にしていたものらしい。

シエスタの説明が終わって少し経ったとき、

「……そろそろ貴方の魔法について聞きたいことがある」

今まで本を読んでいたタバサが、そう言ってきた。まわりの皆も興味があるようで既に話を聞く体制でこっちを見ている。

「わかった。俺の答えられる範囲でなら答えるよ」

「……貴方は何故魔法が使えるの？」

「それはこいつのおかげだな」

「こいつってその剣のこと？」

「そうゆうこと。剣じゃなくて刀だけだな。こいつを持った時に力の使い方が頭に入ってきたんだ」

タバサの質問に『護り』を見て答えると、キュルケが確認してきたことを訂正して答える。

「……なら、あのときオーク鬼の攻撃を防いだ楯のような魔法と足元に見えたものは何？」

「俺はただ護りの力を集中しただけで、足元に現れた魔法陣も力を使おうとしたら現れたから、何と言われても俺にはうまく説明ができないんだけど」

本当はもう少し詳しく説明できるけど、そうすると言わなくていいことを言ってしまうかもしれないから、皆には悪いけどぼかしをいれさせてもらった。

「流はその刀をどうやって手に入れたんだ？ それから、どうやってこの世界に来たんだ？」

「この刀は元いた場所で俺を此処に連れてきた奴が渡してきたんだ。こつちには気絶している間に連れてこられたから、こつちに来た方法が解らないしそいつ自身がこの世界にいるのかさえ解らないんだ」

「流さんはその刀を持ったら使い方が解ったとおっしゃっていましたが、私みたいな平民でも使えるものなんですか？」

シエスタの質問はかなり答え辛い。神剣のこととか色々教えないうようにしてたから、無理なんて言ってしまうと何故？ って聞か

れたときの言い訳が苦しくなる。かといって解らないって答えて、試させて欲しいなんて事を言われた時に渡して大丈夫なのかどうかも解らないし、どう答えよう。

「渡しても大丈夫よ」

(『護り』?)

「私達の声は契約者以外には聞こえないわ。だから他の人からしたら、切れ味の良かったあの武器でしかないから渡しても大丈夫よ」

助かった。おかげでへたな言い訳をしなくて済んだ。

「そのあたりはよく解らないけど、試してみるか？」

「え、えっと。いいんですか？」

「ああ。かまわないよ」

「ありがとうございます。……少し重いですけど、特に変わったこととはありませんでした」

「そうなの？ あたしにも貸して。……ホントだ。変わったことはないわね」

問題が解消されたところで『護り』の許可も得てシエスタに渡したところ、何も起きなかったことが残念そうだった。さらに、それを見たキュルケ、タバサ、ギーシュ、才人も試してみたかったようで、持ってみるがシエスタと同じ結果になった。

そんなことをしているうちにタルブの村の近くまで来たようで、メイジがいると村の人が驚くかもしれないとのことで、シエスタが先に戻って羽衣のある場所までの地図を取りに行くことになった。

しばらくして戻ってきたシエスタの持ってきた地図をみると洞窟を抜けた先にある竜の羽衣があるらしく、シエスタの案内で洞窟の場所まで進んでいる。洞窟は村から少し距離があったため、シルフィードに乗ってきた。

洞窟に着いてからは、洞窟内が暗く先が見えないためキュルケの使い魔であるフレイムに、先頭で火を吐いてもらい松明代わりになってもらうことになった。初めは洞窟と言っても、2、3人通れるような広さを考えていたのだが、実際に入ってみると中は意外と長く長かった。

「どこまで続いているのかしら」

「わかりません。村の人は此処には近づかないんです。なんでもオーク鬼の巣があるとか言われてて」

「そうゆうことは最初に言ってよ」

オーク鬼の巣か。確かにあれが複数もいればやり方にもよるけど、普通の人が退治するのはむりだろうな。今いるメンバーでもさすがにこんな場所で襲われたら危険すぎる。

「なあ、タバサ。もし此処で襲われたら何体くらいなら撃退、もしくは逃げ切れると思う」

「……何故、私に聞くの？」

「何故って言われても、この中で一番冷静に物事を考えられそうだったからかな」

「……そう。……此処は視界が悪すぎる。1体でも見かけたら一度外に出て装備を整えたほうがいい」

キュルケとシエスタの話聞いて、万が一のことを考えてタバサに相談することにした。他の人だと、出会ったら倒せばいいなんてことを言いそうだったからなんて言えない。実際にタバサの案を聞いてタバサに聞いてよかったと思っっている。

タバサの案を聞いて少し歩いた時だった。

「……私達以外の誰かが来てる」

タバサの突然の発言に皆の足が止まった。その後、息を殺して耳を澄ますと、だいに後ろの方から足音が聞こえ始めた。

シエスタには後ろに下がってもらい、俺と才人が前に出てお互い武器に手をかける。

「誰だ！」

「っ！？何奴！」

向こうは俺達が居ることを知らなかったようで、才人の声に驚いて足をとめた。とっさに物陰に隠れたのか、声しか聞こえず相手の姿が見えない。

少しの間お互いに睨みあっていたが、突然後ろの方に何か落下してきた。おそらく相手が何かしてきたのだろう。こっちにはフレイムの火を灯りしているから向こうからすればこっちは丸見えだろう。

「今のは警告ですよ！ 命が惜しくば立ち去りなさい！ 貴重な歴史的遺物を狙う盗掘団め！」

「コルベール先生！？」

「あ？ き、君達！？」

相手からの威嚇攻撃が終わったとき、相手が身を乗り出したのが先程まで見えなかった相手の姿が見えたが、どうやら知り合いだったらしくお互いに驚いていた。

「竜の遺跡が此処にあると言う情報を得て、発掘に来たのですがまさか君達がいるとは思いませんでした。それにしてもこんな身近に君のような研究資料がいたとはなんたる行幸。ところでそちらの方は」

「上代流と言います。こちらの言い方をすると流上代です。いろいろありまして一緒に行動させてもらっています」

「私はジャン・コルベール。トリステイン魔法学院の教師をしています。見たことのない服ですがどこの出身ですか？」

先程までの相手は才人達のいる学園で教師をしているコルベールさんと1人の生徒だった。コルベールさんは濃い青色の教会で神父さんが着ているような服を着て、手にタバサと同じくらい長い杖を

持っている頭が寂しい人だ。さっきの威嚇も多分この人だろう。生徒の方は離れた場所で才人と話をしているため、誰なのかわからなかった。

「出身は才人と比較的近い場所です。この服は、こちらで言う教会で働く人の服と違ってください。俺の親戚がそこを営んでいて、俺はそこで手伝いをしていたときにこっちに飛ばされたのでこの服装なんです」

「おお！ 君はサイト君と同じ異世界の人ですか！ 道理で見慣れない服装な訳です！ いろいろと詳しく聞きたいところですが、それは後でじっくり聞かせてもらうこととして、今はその竜の羽衣とやらの所に進みましょう！」

コルベールさんの号令でコルベールさんを先頭に進んでいくが、才人と桃色髪の子が話に夢中で置いて行かれそうになっていた。しかし、コルベールさんからの質問に、異世界の事などややこしくなりそうなことははぐらかして答えたのだが、すでに才人が異世界から来たことを知っていることには驚いた。後でこの事を知っている人が他にいいのか才人に聞いた方がいいかもしれない。

「なあ才人。コルベールさんは、才人が異世界から来たことを知っていたみたいだけど、このメンバー以外でほかにも知っている人はいるのか？」

「ああ、いるぞ。昨日話した魔法学校の校長も知ってるぞ。平民や貴族とかは気にしないいい人なんだ。ところでなんでそんなこと聞くんだ？」

「たいした理由じゃないんだが、これからの衣食住の問題とかいろ

いろ相談できそうな人がいないか確認してみたかったんだ」

食と住は昨日のテントを借りれたら1人でもなんとかなるが、この世界の通貨や文字に関してはどうしようもない。

「サイト。そいつ誰？」

才人と話をしていると、才人の隣にいた桃色髪の子が話しかけてきた。

「ああ、紹介するよ。ルイズ、こっちは流。俺と同じところ来たんだ。流、こいつはルイズ。俺をこの世界に呼び出した人物で、昨日話した俺が使い魔をしている人物だ」

「才人から紹介されたが上代流だ。こっちの言い方だと流上代だ。よろしく」

「サイトと同じで変わった名前なのね。私はルイズ・フランソワーズ・ルブラン・ド・ラ・ヴァリエール。トリステイン王国の公爵家であるヴァリエール家の3女よ」

コルベールさんと一緒に来ていたのは、才人を呼び出した人物でルイズというらしい。無い胸を張って自信に満ち溢れているかのような態度をとっているルイズだが、正直な話俺には子供が背伸びしているふうには見えなない。

そうこうしているうちに何事もなく出口についた。洞窟の外は森が広がっており、目的地までもう少し歩かなければならいそうだ。

森の中をしばらく歩いていると、少し開けた場所に苔の生えた木製の倉庫のような建物が建てられていた。コルベールさんは入口に

あつた錠前を開けようとしていて、皆は周りに集まっていた。そんななか、タバサが1人離れたところにある人と同じくらいある大きな岩を見ていたのを見つけて、後ろの方にいた俺と才人、才人の様子に気付いたルイズとで様子を見に行く。

「タバサ、何見てんだ？」

「その岩がどうかしたのか？」

タバサの元に着いた俺はタバサの見ていた岩を見て固まった。いや、岩に掘られた文字を見て固まった。おそらく才人も同じように固まっていると思う。

「見慣れない文字ね」

「海軍少尉佐々木武雄。異界の地に眠る」

「読めるの？」

ルイズが岩に掘られた字を見て、見慣れないと言ったのはあたりまえだろう。シルフィードで移動しているときに、タバサの持っている本を見せてもらったがそこに書いてあつたのは見たこともない文字だった。この岩に掘られた文字は、この世界の住人ならまず間違いなくルイズと似たような言葉しか出ないだろう。それを才人が読み上げた2人の視線が才人に向くのはしかたがない。

「日本語。俺と流にとっては一番身近な俺達の国の言葉だ」

そう。岩に掘られた文字は普段から使っている日本語だった。そのことにルイズは驚いている。無表情でよくわからないがタバサも

驚いていると思う。

「あつた、これだ！」

倉庫の中に入って行ったコルベールさんの声が聞こえて、俺たちもそつちに向かった。

倉庫の中にあつた物それは戦闘機だった。

（なあ『護り』。これとこれに乗ってたシエスタの曾お爺さんって、どうやってこの世界に来たかわかるか？）

「無理ね。私は世界のこととかいろいろ知っているけれど、さすがに世界を移動する方法のことは知らないわ。その時の状況がわかれば可能性ぐらいは言えるかもしれないけれど、今言えることは流みたいに跳ばされたか、才人みたいに誰かに召喚されたか、もしくは第3の方法でこの世界に来たのかわからないってこと」

（そつか。……この世界に来た方法がわかれば、その方法で帰れたかもしれないって思ったんだけどな）

「流の考えを否定するつもりも希望を壊そうとしているつもりはないけれど、その方法で元の世界に帰れるかはわからないわよ」

（？ それってどうゆうことなんだ？）

「私は世界を移動する方法は知らないけれど、世界が無数にあることは知っているわ。並行世界って言葉ぐらひは聞いたことあるわよね。つまり流が居た世界と才人が居た世界、シエスタって子の曾祖父の居た世界が同じ世界ではない可能性があるの。わかった？」

(ああ。あまりわかりたくなかったけどわかった)

『護り』の説明はわかりやすかった。けれど、わかりやすかっただけに帰れない可能性が高いことに気分が落ちる。コルベールさんが才人と俺に帰れる可能性があることを教えてくれるが、さっきの話聞いた後では才人のように喜べない。唯一の救いはこの話を聞いた後で、説明されなかったことだろう。

その後、戦闘機の状態の確認や倉庫の中を漁っているうちに日が傾いてきた。そのため今日はタルブの村でお世話になり、明日戦闘機を王宮に頼んで魔法学院まで運んでもらうことになった。

村に着いた後、コルベールさんが村長に事情を話してシエスタの家で夕飯をご馳走になり男性は村長の家に、女性はシエスタの家に泊めてもらうことになった。

次の日、昼前ごろにコルベールさんの呼んだマンティコアと言う生き物を使うマンティコア隊が到着したためシエスタはそのまま村に残り、戦闘機はマンティコアでコルベールさんは此処に来るために使った馬車で残りはシルフィードで学園に向かっていった。

私はもう興奮が収まりませんですはい。

学園に休みを取って竜の遺跡があると思われるタルブの村に行ったのですが、そこにあった竜の羽衣、それを見つけたことができたのです。しかもそれはサイト君の世界の物で確か零戦という名前でしたね。今は学園に運んでもらった零戦を学園長に見てもらっているのですが、突然見たこともないものが学園の庭に運び込まれたものですから、生徒のみなさんが物珍しさに見に来てしまってますね。

「以前は海で遭難しとから今回は山で遭難するんじゃないかと思っておったがこれまた凄いものを見つけてきたの。……それでサイト君と同じ世界の少年というのはどこにおるのかの」

「今はサイト君達と一緒に調理場の方で昼食を食べています。彼の服装は目立つのでここよりは幾分か気は楽でしょう。ああ、早く彼の話聞いてみたいです」

そして、私が興奮しているもう1つの理由がタルブの村で出会った少年ナガレ君です。彼はサイト君と同じ世界の出身。しかも、その世界の神に仕える仕事を手伝っていたとか、これはもういろいろと話を聞いてみたいものです。

「彼に興味を持つのは構わんが、彼が不思議な魔法を使ったというのは本当かね」

「私も直接見たわけではないのでなんとも言えませんが、ミス・タバサやミス・ツエルプストー達の話聞いた限りでは嘘ではないと思います。私もその話を聞いて、彼が寝ている時にディテクトマジックをかけてみたのですが……結果は、かなりのそれもスクウエアクラス以上と思われる程のおそらく魔力だと思うのですが、それほどのものを感知しました。さらに彼の持っていた剣にもかけたところ、少なくとも彼と同等もしくはそれ以上の彼と同じものを感知しました」

そう。洞窟で彼らと合流して零戦を見つけた場所で、改めてミス・タバサ達にナガレ君との出会いを教えてもらったのだが、オーク鬼の攻撃を防いだらしい盾の魔法や足元に現れたという魔法陣の話聞いた。その話を聞いた私は実際に見ていないので詳しい事はわかり

らなかったが、気になった私はタルブの村でナガレ君が寝ている時にディテクトマジックをかけたのだ。結果は今話した通りだ。

「うむ。そのあたりのことも少し話してみた方が良いのかもしれんな。コルベール君今からその少年を学園長室まで連れてきてくれるか。今ならあまり人目に着かんじゃろう」

「わかりました」

昼過ぎに魔法学園にいた俺達は、昼飯を食べていなかったため調理場で何か食べさせてもらいに来っていた。部外者の俺がついて行っているのか確認すると、料理長と才人は知り合いで気前のいい人らしい。

才人の言うとおり料理長のマルトーさんはいい人で、説明したら気前よく昼飯を用意してくれた。

「ナガレ君昼食はもう摂ったかね？ まだなら待つが、大丈夫なら学園長室までついて来てくれるかい。学園長と今後のことを話し合いたいのだが」

「わかりました。もう食べ終わりましたから大丈夫です。それじゃマルトーさんごちそうさまでした」

「おう。また来ることがあるなら顔出しな。また飯をご馳走してやるよ」

「はい。その時はぜひ」

マルトーさんたちと別れ、コルベールさんに連れられて学園長室まで来た。部屋には俺とコルベールさん、白く長い髭が目を引くコルベールさんと似た服装の老人の3人だけだった。

「君がナガレ君じゃな。君のことはコルベール君から少し聞いておるよ。わしはこの学園の学園長をやっておるオールドオスマンじゃ」

「上代流です。俺も才人からお2人が異世界のことを知っていることを聞いています」

「それならさっそく本題に入るとしよう。まず、わし等はサイト君がこちらに来た方法はわかっているのじゃが、君はどうやってこちらに来たのかを知りたい」

「才人たちにも言いましたが、俺がこちらに来た方法は知りませんが、俺をこっちに連れてきた人物には心当たりがあります。俺はそいつを探しているのと問い詰めたいことがあるのでこの世界のことを詳しく教えていただけませんか」

「それはかまわんよ。しかし、コルベール君から聞いたんじやがお主はサイト君と一緒に帰らないらしいの理由を聞いてもいいかの」

そう。俺は『護り』に話を聞いていたから才人からの誘いを適当な理由をつけて断った。

「才人には言っただんですが、仮に戻ったとしても俺をこっちに飛ばした奴にまたどこかに飛ばされたくはないので、俺はそいつをどうにかしてから帰ります」

「しかしナガレ君それは考えすぎではないのですか。君の言う相手がまだ元いた場所の近くにいたりとは限らないうえに、こっちにいるのかすらわからないのですよ」

「まあ落ち着きたまえコルベール君。それでナガレ君。今、コルベール君が言ったようにその相手が、こちら側にいない可能性もあるんじゃないぞ。その時はどうするつもりじゃ」

才人にも話した俺がこの世界に残る理由、と言っても一番肝心な並行世界の可能性ことは言っていない。そんな理由にコルベールさんやオスマンさんが指摘してくるが、考えを変えるつもりはない。それに今の考えが実際に起こる可能性は高いと俺は考えている。わざわざ『護り』を渡してから跳ばしてきたんだ。単なる実験とかじゃないことぐらいは俺にだってわかる。

「いないのならないで構いません。そのときは才人と似たような方法で帰ります。今は奴が、暴君がこっちにいるのかどうかをはっきりさせたいんです」

「わかった。君がそう決めたのなら止めはせんよ。それと、君が使う魔法についてなんじゃが、わしが聞いた話じゃと足元に見慣れない文字の入った魔法陣が現れたり、その魔法陣と同じような模様の盾を出したと聞くが本当かね」

「本当ですけど、それがどうかしましたか？」

「うむ。それがのお。ハルケギニア大陸では始祖ブリミルを崇めておつての。貴族連中は頭が固いためそれを蔑ろにする者や異端の力は、邪教徒や邪教の力として考える者がそこそこおる。つまり君の魔法が邪教の力として考える者が出てくる可能性が高いのじゃ。だ

から人目につくところで、特に貴族の目につくところでは力をなるべく使わないで欲しいんじや」

多分一難去つてまた一難つてこういうことを言うんだらうな。俺がこの世界に残ることについての話が終わったと思つたら、今度は人前で力を使えば追われる身になる可能性があるなんて。っていうか誰だよそんなことを言い始めた奴は！

まあ普段の生活で力を使うことはないだろうから問題ないと思うけど、万が一そんなことになったら暴君探しどころじゃなくなるな。そのことを伝えると2人も安心していた。

「今のところわしが聞きたいことはこれくらいじゃ。今日はこのくらいにして、明日君がこの学園にいる間の扱いを決めたいから今日は学園の客室に泊つていきなさい。こつちのことはそれ以降にでもコルベール君の時間があるときに教わりなさい。コルベール君案内してあげなさい」

「わかりました。では行きましようかナガレ君」

「はい。しばらくお世話になります」

学園長室を出た後は、夕飯までの間にコルベールさんに学園内を簡単に案内してもらつてマルトーさんのいる調理場で夕飯をもらった。夕飯の後コルベールさんに連れられた客室は広く、天蓋付のベットの横長のソファ、しっかりと鏡付きの机等が置いてあつた。

「ここがナガレ君に使つてもらつ部屋だ。お風呂に入りたければ生徒や先生の時間外になるが、私に言ってくれば入ることもできるが今日から使うかね？ それか、サイト君が調理場近くの洗い場に作った君たちの世界のお風呂があるが、そちらを使つてもいいかサ

イト君に聞いてみるかい」

「才人が風呂を作ったんですか。その風呂が気になるんですけど、才人ってどこに寝泊まりしてるんですか？」

この世界のことはまだよく知らないが、電気がないので才人はどうやって風呂を作ったんだ？ それに、今気が付いたことだが俺は着替えの服がない。才人もこっちに来た時の状況を聞く限りでは、着替えがないのは同じはず。いくらなんでもずっと着続けていることないだろうし。

「サイト君はミス・ヴァリエールの使い魔だから、女子塔にある彼女の部屋で一緒に生活してるよ。案内しましょうか？」

「お願いします」

才人が作った風呂というのは五右衛門風呂のことだった。才人に話をした後はコルベールさんに火を点けてもらい、風呂に入って今は部屋に戻ってきたところだ。服に関しては、今日のところは風呂に入っている間に濡らした服を風呂の火で乾かしたが、早めに別の服を用意しないとイケないな。

「なあ『護り』。お前の言ってた可能性のことを考えてこっちに残ったけどさ、これからどうしたらいいと思う？」

「この世界の事を知った後に暴君を捜すんじゃないの？」

「そのつもりだけどさ。いまさらだけど不安になってきたんだ」

「不安になるのは仕方がないことだけど、あまり考え込まない方がいいわよ。この世界のことをあまり知らないから、そんな風に考えってしまうのよ。いろいろと教わって知識をつければ、今は先が見えない方針くらいはたてられるようになるわよ」

「そうだね。少し考えすぎていたかもしれない。明日もオスマンさんと話をするんだし、その時に服のこととか相談してみよう」

「それが良いと思うわよ。これからも私達は一緒なんだから、何かあったらいつでも相談に乗ってあげるわ」

「ありがとう『護り』。今日はもう寝るよ。おやすみ」

「ええ。おやすみなさい流」

第2話（後書き）

前書きにも書きましたが、アンケートをしてみようと思います。

アンケートの内容は、

1、話が短くてもいいから更新速度は早い方がいい。

2、更新速度は遅くても話が長く、しっかりしてるほうがいい。

の2択です。

本当は速くてしっかりしたものが書ければいいんですが、作者の実力では難しいのでこの2択にさせてもらいます。

アンケートの答えがなければ今のペースで進むと思います。

それから、いままでは知り合いに添削等を頼んでいたのですが、今回は「試しにいきなり出してみたら」と言われてそのまま出しているので、誤字・脱字または「この話は余計だ」とか「この話はいた方がいい」等のご意見がありましたら、私自信が生かせるかどうかは別にしてぜひ感想に書いてもらえればと思います。

今後とも『新たなるエトランジェ』をよろしくお願いします。

第3話（前書き）

読者の皆様お久しぶりです。六壬式盤です。

前回の投稿から1月半近くかかってしまいました。

この作品を読んでくださっている方や、

お気に入り登録して下さっている方にはご迷惑をおかけしました。

これからは、なるべく1月以内に投稿できるようにしたいと思います。
す。

第3話

次の日、世時計がないから正確な時間がわからないが、おそろくいつも通りの時間に起きたと思う。寝なおしてもよかったが目が覚めてしまっていたため、風呂の近くにある水場で顔を洗ってすっきりすることにした。

顔を洗ってすっきりした後、部屋に戻ったが食事のことや何時何処でオスマンさんと話をするのかを聞き忘れていたせいで、不用意に部屋から動くことができないでいた。

初めは顔を洗った後、『護り』を使いこなせるように素振りを考えていたが、先ほどの理由からいろいろと決まるまですることはできない。かといって何もしないのは暇だということで、相談の結果精神修行をすることになった。何故精神修行をするのか初めはわからなかったが、『護り』が言うには技術とは別に『護り』の力をより引き出すには、精神を鍛えなければならぬらしい。と言う訳で精神を鍛えることになったのだが、鍛えるといっても俺が知っているのは座禅のまね事ぐらいしかない。

座禅を始めてしばらくたったところ、ノックが聞こえてきたのでコルベールさんでも来たのかと思い、ドアを開けるとメイドの人が朝食を持ってきてくれた。どうやら昨日のうちにコルベールさんが頼んでくれたらしい。丁度良いのでなにか伝言を聞いてないか尋ねたところ、コルベールさんが朝食を終えた後にくるからそれまで待っていて欲しいとのことだった。

朝食を終えてもう1度座禅を始めようとしたところでノックが聞こえてきた。先程のメイドさんの伝言通り、朝食を終えたコルベールさんが呼びに来てそのまま学園長室に向かつて行った。

「おはようナガレ君。どうじゃ、昨日はよく眠れたかの」

「おはようございますオスマンさん。昨日は十分に休ませてもらいました」

「それはよかった。……さて、今日はナガレ君がここにいる間の待遇についてじゃが、勝手だがこちらで幾つか候補考えさせてもらった。できればそこから決めてもらいたい」

「わかりました。俺はそれでかまいません」

「そうか。まず1つ目はこの学生として生活すること。これのメリットは衣食住の用意を全てこちらですること、コルベール君や僕に会うのに下手な理由を考えんで済むことじゃ。かわりにデメリットとして卒業までここにおいてもらうこと、君の魔法がばれる可能性が高いこと2つじゃ。

2つ目に僕の客人としてここにいること。メリットは魔法がばれにくいこと、デメリットはあまり自由に動けないことじゃ。

3つ目にここで働くこと。メリットは給料をだすことができること、デメリットはこちらのことを学ぶ時間と自由な時間が少ないこと、身分を平民とするためなにかと不便なことがあることじゃ。

最後に君の事情を知っている生徒の専属従者になること。メリットはコルベール君が忙しいときに代わりに教えてもらえること、デメリットは従者の仕事をしてもらうこと、その生徒が卒業するまでここにおいてもらうことじゃ。最後に關しては生徒に確認を取らんといいかんから、どうなるかはわからん。食事や住む場所も程度は変わる

が用意するからそこは気にせず、充分に考えてから選んでくれ」

とりあえず、自由に動けないとなると『護り』を使いこなすための特訓ができなくなるから2つ目は没だな。1つ目も、デメリットがきつい上に字が読めないからこれも没だ。3つ目は給料が出るのはかなり魅力的なんだが、デメリットがけっこうきついんだよな。とりあえず保留にしよう。最後が1番動きやすいと思うんだが、問題は選ぶ相手と仕事の内容だな。

「4つ目にある従者の仕事はどんなことをするんですか？」

「主な仕事は主がどこかに出かけるときについて行って食事や寢床の手配や準備をしたり、身の回りの世話をしたりすることかの。細かいところはお互いに話し合って決めてもらいたい」

そうになると、ギーシュは同じ男として気楽にできそうだけど何か無茶なことを言いそうな気がするからやめとこう。ルイズは才人に聞いた限りだと馬用の鞭で叩いて来たり、才人のことを犬扱いしたりしているそうだし絶対に選びたくないな。

キュルケは前の2人のように無茶なことは言わない気がするんだけど、一昨日の宝探しはキュルケが言い出したことらしいから、その行動力と話してみた感じのになにかと苦労しそうなのは俺の気のせいだと思いたい。とりあえず保留にしよう。最後にタバサだけど、いつも本を読んでいるみたいだから4人の中で一番物知りだと思う。ただ、初めて会ったときはかなり警戒されたりしたし許可をもらえないかもしれないよな。

最後が一番動きやすいんだし、ダメもとでタバサに聞いてみるか。ダメだったらその時に他の選択を選べばいいんだし。

「4つ目の話をタバサにしたいんですけど、どこにいるかわかりますか？」

「うむ。それなら」

バンー！

「学園長！！ 一大事です！！」

学園長が答えようとしたとき、突然コルベールさんと色違いの服とマントをした人が、勢いよく入ってきてオスマンさんに詰め寄ってきた。

「なんじゃ騒々しい。それに僕は今、大事な話をしとるんじゃぞコト君」

「私の名前はギト です！！ 今は学園長のおふざけに付き合っている暇はありません！！ アルビオンが」

初めは飄々とした感じで接していたオスマンさんだったが、アルビオンと聞いた途端鋭い表情にかわっていた。

アルビオンは確か空に浮いている浮遊大陸のことだよな。なんか深刻な顔してるけど、もしかしてその大陸がどこかに墜落でもしたんだろうか？

「ナガレ君。すまんが今日はここまでにさせてくれんか。緊急の出来事が起こってしまったのじゃ。しばらくは今使ってもらっておる部屋をそのまま使っておいてくれ」

「あつ、はい。わかりました」

俺には聞かせたくはない話なのか、何かを話そうとしていたギトさんを静かにさせた学園長に言われて、学園長室から出て部屋に戻る。緊急の出来事らしいけど、あまり俺達に影響がでなければいいなあ。

学園長との話し合いが中断し、日が落ちてだいぶたったころ部屋にコルベールさんが来て状況を教えてくれた。

どうやら、アルビオン大陸にいるレコンキスタという団体がトリステイン王国に戦争を仕掛けてきたらしい。学園側もその対応として無期限の休校として生徒たちを実家に帰すことにしたらしい。

問題は、俺がどうするかだ。詳しい開戦場所は言わなかったがここからそう遠くないらしく、風竜なら半日もかからない場所らしい。コルベールさんは才人と一緒に帰ることも考え直したほうがいいと言っていた。

日食は明日に発生するため今ならまだ間に合うらしい。正直、この話を聞いてこっちに残らず才人と一緒に行くことに気持ちが悪かった。このまま残っても戦争に巻き込まれるかもしれない。『護り』の力なら巻き込まれても生き残ることはできるけど正直言って怖い。仮に残るにしても、こっちの地理がわからないと何処に行けばいいのかがわからなくなる。

「なあ『護り』、俺はどうしたらいいと思う？ 才人についていけば戦争とは関わらないで済むけど、戻った先が元いた場所かどうかわからない。かといってこっちに残っても、戦争に巻き込まれるかもしれない。巻き込まれなかったとしても、今の俺じゃうまくやっていけるかどうかわからない。もうどうしたらいいのかわからない

んだ」

「流が不安になるのもわかるわ。流が考えに考えて後悔のないようにしてほしいけど、今回は考える時間が少ないわね。けれど、どちらの道を選んでも私はあなたに力を貸すことに変わりないことは覚えておいて」

「……才人と一緒に帰る方を選ぶよ。もし別の日本だったとしても、こっちに残るよりは安全だと思うし」

「流がそう決めたのならそうしなさい。そんな気分じゃないだろうけど今日はもう寝て、明日才人にその話をしましょう。彼にはこっちに残ることを伝えているから、下手をすれば置いていかれるかもしれないわよ」

「そう、だな。寝れるかどうかわからないけど無理やりにも寝るよ。お休み」

結局、昨日はなかなか寝付けず1、2時間ほどしか寝れなかった。朝食を食べ、零戦のある庭に向かうとすでに才人にキュルケ、タバサが揃っていた。才人は零戦のコクピットで何かしていて、2人はそれを眺めていた。

「みんな、おはよう」

「あら、おはようナガレ」

「……おはよう」

「おはよう。いきなりなんだけどさ、流に頼みがあるんだ」

才人からの頼み？ なんだろう？ ルイズがいないみたいだけどルイズに関係のあることかな？ もしそうなら才人には悪いけど、俺も才人と一緒に行くことにしたから断らないといけない。

「ちょうどこっちも才人に話があるんだ。それで頼みってなんだ？」

「今、アルビオンの連中が戦争を仕掛けてきているのは知ってるか」

「あ、ああ。昨日コルベールさんから聞いている」

才人からアルビオンのことが出てきて、なにか嫌な予感がしてきた。

「これからアルビオンのやつらをぶつとばしに行くんだが、流の力を貸してくれ」

才人の言っていることが理解できなかった。才人は元の世界に帰るのではなかったのか。それなのに何故戦争に向かうなんて言い出すんだ。

「才人。お前は元の世界に帰るんじゃないかったのか。なんで戦争に参加しに行くんだよ」

「今朝まではそのつもりだったんだけどさ、ルイズのやつが姫さんが軍を率いているって聞いて軍に志願しやがったんだ。それにアルビオンの連中が今いるのはタルブの村なんだほっておけねよ！」

「才人は怖くないのか。戦争が怖くないのかよ！」

タルブの村が戦場になっっていることは知らなかったから驚いた。それにルイズも何考えているのか理解できない。姫さんが誰か知らないけど、その人が率いているっただけでどうして戦争をしに行けるのかわからない。才人も才人で帰る気でいたのに、突然戦争に行っただルイズたちを助けに行くなんて怖くはないのだろうか。

「そりゃ怖いさ。ガンダールブの力があっても怖いことに変わりねえよ。けど、だからってほっとけるかよ！ それによ、もし俺が帰ったせいであいつらがやられちまったら後味が悪すぎるだろうが！ お前はどんなだよ流！」

そりゃ、俺だってシエスタとシエスタの家族には世話になったからなんとかかしたいさ。けど、俺の力は才人とは違って異端呼ばわりされて追われる可能性があるらしいから、目立つことはあまりしたくない。

「サイト君。竜の血いやガソリンだったね。とりあえずこれだけの数は用意できたよ」

才人の問いに対して迷っていると、コルベールさんが4つの樽を周囲に浮かして持ってきた。

「ありがとうございます。それだけあれば十分飛ぶことができます」

「なあ、才人。この世界ってガソリンがあったのか？」

「これは以前、私が見つけた液体を竜の血液だと思い込んでいろいろと研究していたものだよ」

俺がこの世界にガソリンがあつたのか才人に聞くと、コルベールさんが答えてくれた。それにしてもコルベールさん、あんた何者だ？ 興味本位でこの世界にないガソリンを複製するとか、先生よりも科学者の称号のほうが似合いそうだ。そんなことを考えているうちにガソリンを入れ終わったみたいで、才人はコクピットに座っていた。

「それで流、俺は行く。お前はどうするんだ」

「どうするもこうするもないよ。初めは才人と一緒に帰ろうなんて考えてたさ。けど、お前が戦場に行くっていうのなら俺は俺で勝手にするさ」

おそらく俺が手伝わないと聞こえたのか残念そうな表情をしたあと、気を取り戻して零戦で飛び立っていった。

「タバサ。タルブの村の方角を教えてくださいか？」

「……それを聞いてどうするつもり」

才人が飛び立ったの見てから、俺はタバサにタルブのある方角を聞く。タバサも俺が才人の手伝いをしないと思っていたのか、村の方角を聞いてきたことに怪訝な表情をしている。

「シエスタたち村の人がちゃんと避難出来てるかどうかを確かめに行くんだよ。避難出来たらそれでいいし、出来てないなら避難の手伝いをする。それに零戦に乗っていつでも空中じゃなにもできないしから、ここから走って行くんだよ」

「走ってってここからタルブまでは馬でも何時間はかかるのよ。走っても着くころには戦いは終わってるわよ」

確かにキュルケの言う通り普通なら間に合わないだろうけど、『護り』の力で強化すれば零戦程の速度はでないかもしれないが、十分間に合うぐらいの速度はだせる自信はある。

それを伝えようとしたら、タバサがシルフィードに乗って待っていた。

「……村に行く。だから乗って」

タバサがシルフィードで連れていってくれるのには驚いたけど、乗せてくれるのならありがたく乗せてもらうことにした。

シルフィードの上からは零戦の影が見えるものの、どんどん距離が開いて影が小さくなっていく。

「なんて速さなの！ シルフィードでも距離が開いていくなんて！」

キュルケは零戦の速さに驚いているが、この世界には新幹線や飛行機とかがないんだから普通は驚くよな。タバサがあまり驚いているように見えないけど表情に出ないだけだと思う。

「おお！ こりゃ速い！ 風竜なんて目じゃねえぜ相棒」

「そうだなデルフ」

デルフは零戦のスピードにはしゃいでるようだけど、今はデルフ

にかまう気にならねえ。流ならルイズやシエスタを助けるのに手を貸してくれると思ってたのによ。

「相棒。もしかしてあの不思議な兄ちゃんのことを考えてるのか」

「不思議な兄ちゃん？ それって流のことか？」

「おうよ。どうせあの兄ちゃんがついてこなかったから拗ねてんだ
ろ」

「ち、違えよ！」

なんで考えてることが、デルフにばれてんだよ。

「ま、あまり責めるなよ。あの兄ちゃんは異質だ。多分、そのことに気付いたんだろっよ」

「異質？ どうゆう意味だよそれ？ あいつはどう見たって人間だろっが」

「そうは言うがな。あの兄ちゃんの力は異質だ。俺様も長いこと生きてきたが、あんな魔法見たことも聞いたこともねえ。あれは下手をすると異端者として扱われる。おおかた、そのことを知ったんだろっ。相棒について行けば、大勢の貴族にばれる可能性があるからな。それで断ったんだろっよ」

デルフの話が本当なら、俺は流を危険な目に合わせようとしたのか？ けど、それならなんで流はそのことを話してくれなかったんだ！

「あゝ、相棒。考えてるとこ悪いんだが、もうすぐタルブの村に着くぞ。考えるのは後にして、今は目の前のことに集中しな」

「え、あ、あゝ」

デルフの言う通りタルブの村が目で見えるほどにまで近くに来ていた。村はいたるところから煙を上げて酷い状態だった。流の事は、こいつらをどうにかしてから考える。

「行くぞデルフ！」

「おうよ相棒！」

シルフィードに乗ってタルブに着くころには、才人が零戦に搭載されていた機関銃で火竜を次々と打ち落としていた。

「すごい。アルビオンの竜騎士を簡単に倒してる」

「タバサ。そろそろ降ろしてくれ」

キュルケは才人の活躍を見て驚いていたが、俺は村人が残っているのかが気になっていた。

下に降ろしてもらうとギーシュが土の巨人に追われていた。ギーシュがそのまま走り去ろうとしたが、タバサがギーシュのマントを掴んだことで阻止された。

「き、君達。何してるんだい。速く逃げないと」

「あら、また会ったわね小娘たち。前は中途半端なところで帰っちゃまったけど、今日こそはあの時の借りを返してやるよ」

「知り合いかキュルケ」

「少し前にちよつとあつてね。その時に牢屋に送られたことを根に持つてるのよこの年魔わ」

ギーシュがタバサに文句を言っている間に、土の巨人に追いつかれ肩に乗ってる女の人が声をかけてきた。キュルケ達とは何か因縁があるようだけど、俺には関係ない。問題はギーシュやこいつが村の人達の居場所を知っているかどうかだ。

「ギーシュ。村の人達がどうしてるか知ってるか」

「え、あ、いや、知らないが」

「そつか。……おい、お前！ お前は村の人達がどうしてるか知らないか！」

「はあ？ 村人？ そんなの知らないね。それよりも見ない顔だね。変なかつこをしてるけど、あんた誰だい」

ギーシュもこいつも知らないんじゃないか自分で探すしかないか。村があんな状態じゃ、逃げれる場所は周りの森位しかないんだ。虱潰しに探せば誰かしら見つけれはるはず。いなかったらいなかつたで無事に避難出来たと思いたい。

「ええい、無視するんじゃないよ！」

「っ!? なにすんだ!」

いざ、探しに行こうとした瞬間、土の巨人が拳を振りかぶってきたのを後ろに跳んで回避する。

「あんたが誰だか知らないけど、こいつらと一緒にいるってことはトリステインの人間ってことだろ。だったらあんたは私たちレコンキスタの敵ってことだ。敵を潰すのに理由なんかいらないよ。私のゴーレムで相手をしてやるから覚悟しな!」

「ギーシュ!? オーラフォトンシールド!」

とんでもない勘違いの言葉と一緒にゴーレムの拳が迫ってくる。

ゴーレムの動き自体はそれほど速くはないから、横に避けて腕か足を切り落としてから村のほうに行こうとしたが、俺の少し後ろでギーシュがいまだ座り込んでいるのが見えた。このまま避けるとギーシュにあたると思った俺は、よく考えれば他にも方法があったのだがとつさに『護り』を抜いてオーラフォトンシールドを使ってゴーレムの攻撃を防いだ。

「防がれた!? なんだいそれは! あんたいったい何者だい!」

ゴーレムの肩に乗っている女性は、俺の力を見て驚いているがこっちとしてもいきなりこの力を見られたことは都合が悪い。力を使わずに村の人を助けることは難しいとは思っていたが、村に着いてすぐに使うとは思っていなかった。俺の服装はただでさえこっちの人には、見なれない服装ということ目につきやすいと思う。それなのに、そいつが見たこともない不思議な力を使うとなればより目立つ。

そんなことを考えていると、突然後ろから大量の花びらがゴーレムに向けて飛んでいき、ゴーレムの上半身が花びらまみれになった。後ろを見るとキュルケとタバサ、ギーシュが杖を構えていた。

「はっ！何のつもりかは知らないけど、こんなことで私のゴーレムをどうにかできると思ってたのかい」

確かに相手の言う通り花びらをぶつけたとしても、どうみたって効果はなさそうだ。

「ふっ。錬金！」

ギーシュの言葉と同時に、ゴーレムに付いている花びらが一斉に何らかの液体に変わった。

「ファイアーボール！」

キュルケの魔法がゴーレムにあたった途端ゴーレムが燃えだした。ゴーレムの肩に乗っていた女性も燃えていたが、燃えていたのはフード付きのローブだけだったようでゴーレムから離れフードの付いたローブを捨てるとどこかに逃げて行き、それを見たギーシュが追いかけて行った。

私達は村のはずれにある森の中に避難して、村の様子を見てから少ししていたとき、サイトさんが竜の羽衣に乗ってきたんです。サイトさんの乗る羽衣は、次々と村を襲っていた火竜を倒してくれて

村の人達は喜んでいました。

けど、みんなサイトさんの方を見ていたから気が付きませんでした。私達の隠れていた森の近くに、村を襲ったメイジ達がいたんです。

「ファイアーボール！」

私達が気付いたときにはすでに遅くメイジの1人が魔法を撃つた後でした。私はここで死ぬの？ 死にたくない！ 助けてサイトさん！

「オーラフォトンシールド！」

聞いたことのある声に目を開けると、宝探しの時に出会ったサイトさんと同じ所から来た不思議な力を持っている人、ナガレさんが刀と呼んでいた武器を抜いて、私達に背を向けて立っていました。

タバサ達と別れて周りの森を風潰しに探そうとしたとき、村に一番近い森の入口の近くに魔法使いが数人集まっているのが見えた。別に気にしないでいいはずなのに何故か気になり、そこに向かうことにした。だいたい半分程の距離を進んだあたりで、集まっていた魔法使いの1人が森に向かって火の玉を撃ちだした。森をよく見ると森の中に村の人達がいるのが見えた。それを見て全力で向かい、ぎりぎりでみんなと魔法の間にオーラフォトンシールドを出すことができた。

「……………ナガレ…さん？」

「き、きさま！ 何者だ！」

突然のことにみんな啞然としていたけど、気を取り戻したシエスタが声をかけてきたのに気を取り戻したのか魔法を放った相手が声を荒げてくる。

「シエスタ。怪我はないか？」

「え、あ、はい。大丈夫です。けどナガレさんがどうしてここにいるんですか？」

「そんなことは後回しだ。今は村の人達を別の場所に逃がさないと」

「われわれがそう簡単に逃がすわけがないだろう！」

シエスタたちが無事なことを確認して、みんなに逃げるように言ったが敵にも聞こえていたようで、再び魔法を放とうとほぼ全員が杖を向けてくる。

「ファイアーボール！」

「エアカッター！」

「ロックニードル！」

避難を促そうとしたが、間に合わずいろんな魔法が放たれてくる。村の人たちは、急いで森の奥に逃げようとしているが間に合わない。シールドを張ったとしても、狙いも速度もばらばらで全部防げるかわからない。それならこっちも広範囲の攻撃を繰り返してぶつけて

やればいい。

「マナよ。神剣の主として命ずる。オーラとなりて、我が前に収束せよ。」

詠唱が始まると足元にいつもの魔法陣が出現し、目の前にオーラフォトンが収束して拳程の大きさがある1つの塊が出来上がる。けれど、これはまだ準備ができただけ

「空に上がりて内に秘められた力を開放し我が前面に降り注げ、オーラフォトンクラスター！」

詠唱が終わるとオーラフォトンの塊が、空に上昇していきある程度の高さになると、圧縮されたオーラが爆発し小さな塊がまるで雨のように前方に降り注いだ。小さいといっても威力は凄まじく、相手の魔法も簡単に貫いた。

だけど、俺は神剣の力を理解したつもりでいたけど全然理解していなかった。オーラフォトンクラスターの効果範囲は俺が予想していた以上に広く、降り注ぐオーラの雨は離れていた敵にまでその刃を向け、魔法でガードをしようした奴もいたけどその強靱な刃でガードの上から貫いた。

後ろでは、村の人たちが助かったことを喜んでいたようだけど、今の俺には周りのことを気にかける余裕がなかった。死んだ……殺した……俺が殺した……俺……が。

私たちが助かったことに喜んでいると、何かが倒れる音が聞こえて音のした方を見ると、ナガレさんが倒れていました。

「ナガレさん！！」

急いでナガレさんの許に行つて様態を調べてみると、ナガレさんは血を流していたり、どこかが焼け焦げたりといった怪我をしていなかったで死んでいないことがわかつてホツとしました。でしたら、どうして倒れたのか？ そのことを考えようとしたとき、空が少しの間光に包まれました。光が収まったとき、私の目に映ったのはアルビオンの船が、ぼろぼろになって村のはずれに落ちていく光景でした。

第3話（後書き）

アニメ1期のレコンキスタ戦を、こんな感じで終わらせてみました。
誤字・脱字・感想などがありましたら、ぜひお願いします。

これからも「新たなエトランジェ」をよろしくお願いします。

第4話（前書き）

今回は予定期間内に投稿することができました。これからも1カ月以内に投稿できるようにしていきたいと考えています。

しかし、活動報告にも書きましたが、近々自動車学校に通うことになるので投稿が遅れることがあるかもしれません。

もし、そうなる可能性がある場合は活動報告にて前もって連絡させていただけます。

それと、後書きでアンケートを取っていますので、是非こちらも協力してください。

第4話

俺は今、闇のように暗い場所を彷徨っている。「護り」にいくら話しかけても返事は返ってこず、ここには俺以外だれもいないんじゃないかとさえ思えてくる。

俺がここで彷徨い始めてからしばらくしたときだった。人のような形をした黒い炎のようなものに囲まれた。突然のことに「護り」を抜いて構えようとするが、普段から「護り」を差している右腰には何もなく、いまさらながら自分が丸腰であることに気づいた。

そのことに奴らも気づいたのかどうかわからないが、ゆっくりとこっちに迫ってきた。動き自体はかなり遅いが周りを逃げ場がないほど、囲まれてしまっていて逃げ出すことができない。

「来るな！ 来るな！！」

逃げ場がなくじよじよに詰め寄ってくる得体のしれないものに、恐怖で取り乱してしまいがそんなことで奴らが歩みを止めることはなく、ついに目の前まで詰め寄せられた。それでも奴らは止まらずに纏わりつかれる。なんとかして振りほどこうとしたが、ほどけるどころが逆に服が燃える
さらに周りに集まっている奴らもくっついて、火の勢いがどんどん増していき俺は……

「うわあああああ！！……はあ、はあ、はあ、はあ、夢？」

「流、顔色がよくないけど大丈夫。うなされていたけど何かあった？」

「少し嫌な夢を見ただけだよ。ところでここはどこ？」

倒れる前はタルブの村にいたはずなのに、目が覚めるとどこかの部屋にあるベットのの上だった。

「ここは学園の流が使っていた部屋よ。流が倒れた後、タバサとキユルケがここまで運んでくれたのよ。ちなみに流が倒れてから丸一日寝込んでたのよ」

『護り』の説明を聞いて、これからのことを考えようとしたとき部屋のドアが開いて水の入った桶を持ったシエスタが入ってきた。

「ナガレさん！目が覚めたんですね！」

「シエスタ？なんで学園に？っ！？タルブの村は！村の人は！」

「落ち着いてください。村はぼろぼろですけど、村の人はみんな無事ですから心配しないでください。私はお金を稼ぐために予定よりも早く学園に戻ってきたんです」

それはよかった。助けに行ったかいがあった。

「ところで、才人や他のみんなはどうしてるかわかる？」

「ええ。サイトさんは学園に、他の皆さまは先の戦での功績を認め

られたので、勲章の受容のために王宮にいます。それから学園長がナガレさんが目を覚ましたら、食事の後で学園長室まで来て欲しいとのことでした。なんでも大事な話があるとかで」

大事な話？ なにかは知らないけど、飯の後でいいのならお言葉に甘えさせてもらおう。腹減った。

「マルトーに頼めばすぐに用意してくれますよ。行きましょう」

シエスタの言った通り、調理場にいたマルトーさんはすぐに飯を用意してくれた。まあ調理場に入った時にちよつとしたことがあったけどそれはおいとくとして、飯を食った後シエスタに言われた通りに学園長室に向かった。

「オスマンさん。流です」

「おお、ナガレくんか。待ったぞ。入りなさい」

学園長室に入ると、オスマンさんの他にコルベールさんがいた。

「シエスタに聞いたんですが、なんか大事な話があるそうですけど何かあったんですか？」

「うむ。おそらくお主にとってはあまり良くない知らせじゃ。お主がタルブで何をしていたのかは周りの者から聞いたのじゃが、お主が倒れる前に使った魔法、それが偶然にもトリステイン軍に参加しておった者に見られておったそうじゃ。」

「軍の人間が調査を始めたとき、君はミス・タバサたちによって学園に連れられていたので、その場で捕まる事はありませんでした。」

ですが、君のことをよく知らないタルブの村人は軍からの質問に報奨を渡すためと思ったのか、君が学園の関係者であることを話してしまいました」

オスマンさんの後にコルベールさんが詳しく教えてくれた。けど2人の言った通りってことは、俺のことがこの国の連中にはれたってことで、引き渡しの要求がきたりしたのか？ それともここに軍か貴族のお偉いさんが来たりするのか？

「そんな深刻な顔をしなさんな。確かにお主の引き渡し要求はきたがこちらで適当な理由をつけて拒んでおいた。その理由の件がお主を呼んだ本来の要件じゃ。ところでお主はロバ・アル・カリイエと
いう言葉を聞いたことがあるのか？」

「砂漠のさらに東にあるかもしれない程度に聞いてますが、それがどうかしたんですか？」

「うむ。儂等が考えたのは、君をロバ・アル・カリイエの出身のメイジにして他のメイジの魔法事故に巻き込まれ、トリスティンに飛ばされてきており元の場所に帰るためにも、こちらの魔法に興味をもってこの学園で学びたいと考えている。ということにしてしまったのじゃ。そのため王宮の貴族たちに連れて行かれんかわりに、少なくとも2年。ミス・ヴァリエールたちが卒業するまでこの学園に留まっつて欲しい。その代わり学園では好きに行動してもらって構わん。こちらでいろいろと便宜を図ってやる。ただ、ときどきで構わんから授業にも参加してくれると助かるというのが儂等の気持ちじや。なんとか受け入れてもらえんかの」

あ~~~~。なんとというか。気絶していた間にトントン拍子で話が進んでいたみたいだな。オスマンさんも俺のことを考えてくれた結

果だから、そう邪険にできないし話し自体は別に悪くはないと思う。少なくとも2年ここに留まるのも長いような気もするけど、この世界の字を覚えようと思ったたらどれくらい掛るのかわからないだし、ちようどいいかもしれない。

「そうゆうことならわかりました。最初の予定とは少し違う形になったけど、これからお世話になることは変わりませんし、これからよろしく願います」

「そうか。そう言ってもらえると僕等も助かる。部屋はこれからも今の部屋を使ってくれ。それから最初の授業は、皆への顔合わせということでコルベール君が呼びに行ってもらうから、それまでは自由にしていなさい」

「わかりました。それじゃ、失礼しました」

オスマンさん、いやこれからは学園長って言ったほうがいいか。学園長との話しも終わって2人に、礼をしてから部屋を出る。

今日はまだ時間もあるし広場で『護り』を使いこなせるように素振りでもして身体を動かそう。

Side オスマン

「思っていたよりも簡単に話が進みましたなオールド・オスマン」

「うむ。突然すぎて混乱しているのもあるのじゃろうが、やはりタルブの1件で精神的に参っておるのじゃろう」

「ええ。普段通りにふるまっているようでしたが、どこか影が見え

隠れています」

そう。始めて彼と話をしたときはしっぴかりした青年じゃと思ったが、タルブの1件でそれが誤りだと気づいた。しっぴかりしていたのではなく、しっぴかりしなければならぬと思ひ詰めていただけだったのかもれん。

彼の住んでいたところは、争いのない平和なところじゃと言っていた。そんなところで生活していた彼は、人を殺す覚悟をすることはまずないじやろう。そんな彼が、話を聞く限りそれは偶然じゃったようだが、敵のメイジをそれも十数人を1度に殺したんじや精神的ダメージは相当なものじやろう。

「コルベール君。彼を生徒たちに会わせるときは慎重に頼むぞ。おそらく何人かの生徒は彼の事を聞かされておるかもしれんからの」

「ええ、わかりました。私も時機をみて彼と話をしてみようと思っ
ていますから」

「うむ。では頼んだぞ」

コルベール君と話を終えた僕は、立ち上がり背後にある窓から学園の広場に目をやるとナガレ君が一心不乱に剣を振る姿が見えた。

Side out

広場での素振りを終えた後は、汗を拭いて調理場に向かった。調理場ではすでに才人が夕飯を食べていた。今日の賄いはシチューだ

った。飯を食った後は才人と軽く話したり、風呂にはいつたりした後、部屋で『護り』と今後の方針を考える。

「今更だけどよかったの？ 学園長の話をそのまま受けて。別に表向きはそうしてもらって、実際の待遇を少し変えてもらうこともできたんじゃないの」

「そうは言っても、突然の話でそこまで考えがなかなかたし、授業にでるかどうかは自由にしていみたいだったから別にいいかなと思って」

「わかったわ。それから明日からの訓練だけど、最初は神剣の加護なしと加護ありの素振りで違い知ってもらうわ。それから加護ありで素振りする。これを午前中にもらって、寝る前にだいたい1刻ほど瞑想してもらうわ。あとは自由にしてくれてかまわないわ」

これからは周りを気にせず訓練ができるようになったから、訓練メニューを『護り』に考えてもらっている。と言っても前から考えていたものに少し手を加えただけだったりする。

「確かにその通りだけど、わざわざ言わなくてもいいんじゃないの。まあ、それはともかく訓練は明日からにして今日はもう寝なさい」

「わかった。お休み『護り』」

「ええ、お休み」

確かに眠気もあったから『護り』に促されてそのまま寝ることにした。

気がつくと俺はまた闇のように暗い場所にいた。以前と同じで『護り』はなく丸腰の状態だった。俺はすぐさま駆け出した。以前と同じならまた、例の連中が現れて囲まれるかもしれない。そう思うと体が自然と動いていた。

あてもなく、ただがむしやらに走る。けれど、走る先に奴らが現れては逃げて、現れては逃げてを繰り返しているうちに、いつのまにか囲まれて依然と同じように黒い炎に焼かれた。

「……………はあ、はあ、はあ、またあの夢か」

また、昨日と同じ悪夢で眼が覚めた。外は暗くまだ夜中といえる時間帯だ。

「また、うなされていたけど何があったの？」

心配そうに声をかけてくる『護り』には話しておいた方がいいかもしれない。そう思った俺は、昨日とつい今しがたの悪夢のことを話した。

「そう。流もだいたい予想はついていると思うけど、原因は村で初めて人を殺したことによる精神的なダメージが影響していると思うわ。けれど、私にはどうすることもできないわ。誰かに相談したりしてもいいけど、これは流が自分でのりきらないといけないことよ」

話が終わるころには、外も少し明るさが出てきてもうすぐ夜が明

けようとしていた。

Side シエスタ

皆さんおはようございます。メイドのシエスタです。とは言っても、今の時間は夜が明け始めたばかりなので起きているのは私たちメイドやコックの人たちぐらいでしょうか。ですが洗濯ものを洗っているときに、ナガレさんが広場に出てくるのが見えました。

「ナガレさん。おはようございます。早いですね。どうかしましたか？」

「ああ、シエスタおはよう。ちょっと目が覚めちゃって、二度寝するの中途半端な時間だったから、ちょっと身体を動かそうと思っ
てな。シエスタも早いな」

「ええ。これから皆さまの洗濯物を他の人達と一緒に。他にもいる
いるとすることがありますから、いつもこの時間帯には起きてます
ね」

「そっか。それじゃ、仕事の邪魔するのも悪いし、そろそろ行くよ。
何か俺に手伝えることがあったら、なるべく力になるから言ってく
れ」

そう言ってナガレさんは離れて行ってしまいました。私も仕事に
向かいますよ。

Side out

シエスタと別れてそこそこの広さがある広場にやってきた。

「それで『護り』。昨日言ってた神剣の加護の違いって、どっちからやるんだ」

「そうね。まずは加護がある状態で素振りを50回。その後で加護を消して同じく50回。多分このくらいなら違いがわかるんじゃないかしら」

「わかった」

軽く準備運動しながら訪ねて、ある程度身体をほぐした後で『護り』を構える。力を使って素振りを始める。素振りといっても剣道のような素振りではなく、自分の感じるままに悪く言えば適当に振っていく。数は『護り』が数えてくれるので、気兼ねなく振っていく。

「…47…48…49…50。もういいわよ。今の体調はどんな感じ?」

「ちょっとだけ疲れたけど、まだまだやれそうな気がする」

「それじゃ、5分ほど休憩してから加護なしでやりましょう」

「わかった」

『護り』を鞘に納めてからその場に座る。

それにしても、50回でほんとに違いがわかるのだろうか? 確かにさっきは殆ど疲れることがなく、テンポよく振れていてまだま

だ振り続けていられたと思うし、初めて力を使った時やタルブの村での脚力は元の状態ではまず無理なのはわかる。けれど素振り50回くらいなら同じようにできるはず。この時の俺はそう思っていた。

「そろそろ始めましょうか」

『護り』の声を聴いて立ち上がり構える。

さっきと同じように思うがままに気兼ねなく振っていく。初めの10回ほどは特に疲れることなく振れている。けど、20を過ぎたあたりからだんだんと腕が疲れてきて、40を過ぎるころには一振り一振りが力なくゆっくりとした動きになってくる。

「……47……48……49……50。もういいわよお疲れ様。どう？ 違いがはっきりわかったでしょ」

「はあ……はあ……確かに……違いが……はっきりわかった」

終わったときには息が切れてその場に座り込む。正直ここまで違いがでると、自分の力のなさに軽く凹む。

「それだけ私達の力がすごいつてことよ。今はこれくらいにして、続きは朝食後にしましょう」

あるていど息が整ってから顔を洗うために水場に向かった。

朝食を食べた後、才人やシエスタと軽く世間話のようなものをしてから今朝と同じ広場に向かった。

広場に着いたら今朝と同じように柔軟をしてから素振りを始める。

ちなみに『護り』の考えた訓練方法は、ひたすら刀を振って自分の振りやすい動作を見つけるやり方だったが、さすがにずっと振り続けるのはキツイのでだいたい100回ごとに休憩を入れてもらうことにした。

だいたい5回ほど繰り返したときには、王宮に行っていたキュルケ達も帰ってきて、各々好きなように過ごしていた。そんな中誰かを探しているのかルイズが辺りをキョロキョロしながら庭にやってきた。丁度休憩中だったおれは声をかけることにした。

「誰か探してるのか？」

「え！？ あゝサイトをね。あの馬鹿犬、ご主人様が帰ってきたっていうのに部屋にもいないでどこをうろついてんだか。どこにいるか知らない？」

「最後に会ったのは朝食後に調理場の横にある水場だけど、まだいるかどうかは知らない」

「そう。ありがとう。行ってみるわ」

どうやら才人を探していたようで、飯の後に会っていた事を話すとそのまま水場の方に向かって行った。

ルイズが行ってからまた素振りを再開していると、ルイズの向かった水場から突然大きな爆発が聞こえてきた。

「な！？ 今のはルイズの向かった方から聞こえてきたよな」

急いで爆発の聞こえてきた方に向かう。ルイズはもちろん爆発の聞こえた方にはマルトーさん達がいる調理場もあるし、まだ才人やシ

エスタもいたかもしれない。

水場につくとぼろぼろになってる才人、どこかすっきりとした表情のルイズ、苦笑いしているシエスタがいた。

「なあシエスタ。なんで才人があんなにぼろぼろなんだ？ それにさっき爆発が聞こえてきたんだけど無事なのか？」

「えっと、どこから説明しましょうか。ナガレさんがどこかに行つてからも私達は話を続けていたんですけど、そこにミス・ヴァリエールがとてもいい笑顔で現れまして少し身の危険を感じて離れるとミス・ヴァリエールの魔法が発動してサイトさんがあんなにたんです」

近くにいたシエスタに聞くと、ルイズが嫉妬して才人がぼろぼろになったのはわかった。それにしても、よくそれだけ長い間話が continua。別れてから結構時間が経つてはるはずなんだが。だけど、あの爆発は何だったのかわからない。

「才人がぼろぼろな理由はわかったけど、それなら爆発のほうは何なんだ？」

「それはミス・ヴァリエールの魔法です。詳しくは知らないのですが、ミス・ヴァリエールが魔法を使うと爆発がおきるんです。」

なんとも危険きわまりない魔法だな。魔法を使うとってことは、今まで見たことのある魔法全部が爆発になるってことだよな。実際に爆発するところを見てないからなんともいえないけど、魔法を使う側からしたら立派な不意打ちになりそうな気がするのは俺だけだろうか。それよりも才人は無事なんだろうか？

「才人、生きてるか？」

「お、おう。流か。なんとか、生きてるぜ」

思ったよりも無事なようで、ただ見た目ほどぼろぼろになったわけじゃないみたいだった。

「そっいえば流は今まで何をしてたんだ？」

「広場ですつとこいつを振ってたんだよ」

ある程度回復した才人がふとそんなことを聞いてきたので、『護り』を見せて訓練していたことを教える。

「流は十分強いんじゃないのか？」

「強いのはこいつで俺自身は全然強くないさ。強く見えるのはこいつの力で身体能力が上がってるからだ。だから、俺はこいつの力を使いこなすために訓練してるんだ」

俺が『護り』の力をちゃんと使いこなせていたら、タルブの村であんなことにはならなかったはずだ。

「なあ、顔色が悪いぞ。大丈夫か？」

「あ、ああ大丈夫。なんでもないよ」

「それならいいけどよ、訓練のしすぎじゃねえのか？ もうすぐ飯の時間だし、今日の訓練はもう終わったほうがいいんじゃないのか」

「？」

「元々訓練は午前中だけだから問題ないさ」

村のことを考えるとあの事を思い出してしまつて、才人だけじゃなくルイズやシエスタにも心配そうな表情をしているけど、あまり心配をかけたくなかつたからなんでもないふうにならう。

「それならいいけどさ、あんま無理するなよ。それより飯食いに行くぜ」

「ああ。俺も訓練で動いたから腹減つた。行くか」

ちょうど切りがいいので、才人の誘いによつて昼飯にすることにしました。

飯を食い終わった後は、この世界の文字がどんなものか見てみたくなつてコルベール先生の研究室に来ている。

コルベール先生の研究室は、はつきりいつて散らかつていてガソリンやよくわからない液体やらの臭いが我慢できないほどじゃないけどキツイ。

「コルベール先生。ちょっと、この世界の文字がどんなのか見たいんですけど何かありませんか？」

「おお、ナガレくんではないですか。こちらの文字ですか。私の研究資料のものです、これでいいですか」

コルベール先生が見せてくれた紙に書いてあつた文字は英語に形

が似ていたけどまったくわからなかった。

「わかってたことですけど、さっぱりわかりません」

「まあ、それはしかたがないですな。それに文字を覚えようと思つたら、誰かに翻訳してもらいながら覚えるか、絵本のような字が少ないものを使って見るのもいいでしょう。それはナガレ君がやりやすいと思つた方法でやればいい。私も時間があるときはなるべく協力しますよ」

「ありがとうございます。これからいろいろやってみようと思つんですけど、何かよさそうな本って知りませんか？」

「そうですねえ。今度、学園の図書室にある物で何かないか探しておきましょう。後はミス・タバサに相談してみてもどうでしょうか」

確かにタバサはいつも何かを読んでいるし、何か読みやすい本を持ってるかもしれない。

「わかりました。タバサに聞いてみます。ありがとうございます！」

コルベール先生にお礼を言つてタバサを探すために部屋から出る。勢いよくコルベール先生の研究室を出たはいいけど、肝心のタバサがどこにいるのかわからなかった。とりあえず、午前中は庭で本を読んでいたのを見ていたから庭を風潰しに探していくが、どこにも見当たらなかった。

外にいないのなら部屋にいるとは思うんだけど、この学園は女子塔・男子塔・教員塔と別々になっていて、俺が使っている部屋は教

員塔にある客室のためタバサの部屋の場所がわからない。

才人に頼んで読んできてもらおうとも思ったが、昼食後にルイズのところに戻っていったきり姿を見てないからそれもできないでいた。

「学園長かさっきの男に場所を聞けばいいんじゃないの？」

「学園長はつごうがわからないから行き辛し、コルベール先生も勢いよく出てきたから学園長より行き辛し」

「はああ……。そんな理由で今まで行かなかったの？ まあ、流がそれでいいならいいけど、もう少し周りを頼ったら？」

「ああ。わかったよ『護り』。けど、今日は走りまわって疲れたからまた明日からにさせてくれ」

「身体の疲れは私が最適な状態にしてあげるわよ。そうすれば今からでもいけるでしょ」

『護り』の言う通り神剣は身体の疲れとかは、いつもベストな状態にしてくれるけどタバサを探するときに神剣の力を使っていなかったから、疲れてるのはホントの事だ。

「なにもいきなり字を覚えろなんて言っていないのよ。何かよさそうな本がないかを聞くだけなんだから」

「わかった。それじゃ頼むよ」

神剣の力で疲れをとった後、コルベール先生に事情を話してタバ

サの部屋まで案内してもらった。

「ここがミス・タバサの部屋だよ。どうする私からミス・タバサに説明しようか？」

「いえ。俺のことなんですから俺から説明します」

「わかった。それじゃ私は研究室に戻るよ。また、なにかあったら遠慮せず相談してくれてかまわないよ」

「ありがとうございます。コルベール先生」

Side タバサ

いつものように部屋でお気に入りの本を読んでいると、ノックが聞こえてきた。

「タバサ。流だけどいるか？ 少し相談したいことがあるんだ」

上代流。キュルケの突拍子のない思いつきの時に出会った人。サイトと同じ所からきた不思議な力をもった人。その彼が私に相談？ 彼なら私じゃなくてもサイトやコルベール先生でも相談に乗ってくれる人はいるはず。

けど、彼の使う魔法は私達の魔法とは全然違うみたいだし、もしかしたら彼の力で母様を……

「タバサ。いないのか」

再び聞こえてきたノックと彼の声に、私は話を聞いて内容によっ

ては条件付きで受けようと決めてドアを開けて彼を招き入れる。

「突然おしかけて悪いな」

「構わない。それで相談したいことって何？」

「実はさ、こっちの世界の文字を覚えようと思うんだが、タバサは小さい子が読むような字が少ない物語か何か持ってないか？ コルベール先生に相談したら、学園の図書室を調べてくれるそうなんだけど、タバサはよく読書をしてるみたいだから何か良さそうな知らないかなと思って」

彼が私の所に来たのはわかった。お勧めということならお気に入りの本があるけど、生憎彼の条件にあう本はない。

「……幾つかお気に入りの本はあるけど、生憎あなたの条件にあう本はない」

「そっか。……いくら本をたくさん持っていても、よほどの理由がないかぎり子供の読むようなものがあるわけがないか。ありがとう。それじゃ帰るよ」

私の返事に少し残念そうにしてるけど、対して気にはしてないよ。うでそのまま席を立つとする。

「待つて。聞きたいことがある」

Side out

席を立とうとしたときに、タバサの声が真剣そうな雰囲気だったから椅子に座りなおした。

「こつちも用事に付き合ってもらったしいよ。何が聞きたいんだ？」

「貴方の使う不思議な魔法について」

「？ 前に少し話した気もするけど、あれ以外で？」

以前話した時は『護り』を持ったら力の使い方がわかっただけで、詳しくはわからないってことにしたんだっけ。

「貴方はどんな魔法が使えるの？」

「どんなって言われても、もう少し具体的に」

「貴方はタルブの村でアルビオンのメイジを魔法で倒したとメイドから聞いた。オーク鬼やゴーレムの攻撃を防いだ盾。この2つ以外には何ができるの？」

「俺はまだ完全に力を使いこなせていないから、簡単な治癒や力の底上げみたいな補助系が少し使える程度だけど、それがどうかしたのか？」

タバサからタルブ事を言われた時はあの事を思い出しそうだったけど、なるべく考えないようにして今使える神剣魔法を答える。まあ神剣の力を使えば魔法で底上げしなくても十分な気はするけど。それにしても、何でタバサはそんなことが知りたいんだろう？

「その補助系の魔法には、精神がおかしくなっている人を治す魔法はないの？」

タバサが何故俺の力が知りたいのかわかった。多分、知り合いが家族の誰かがそうゆう状態なんだ。でなければ、こんなピンポイントで質問なんかしてこないはずだ。

「ごめん。こいつの力は補助より防御面が強いから、補助系も防御関係が強いんだ」

『護り』の神剣魔法は名前の通り護ることに特化してる。攻撃の魔法なんかはオーラフォトンクラスターの1つしかなく、補助も俺自身の防御力や抵抗力を上げるといった防御よりの魔法が多い。それに、仮にタバサが必要としている魔法があつたとしても、『護り』の話が本当なら神剣魔法は俺か俺と同じでマナで身体を構成されたやつにしか効かないらしいから意味がない。

「……そう」

普段のタバサは感情がわかりにくいけど、今のタバサは明らかに落ち込んでいた。

しばらく気まずい状況が続き、居心地が悪くなってきたから退室しようとしたとき、ノックが聞こえてタバサが出るとそこにはキユルケがいた。タバサを夕食に誘いにきたらしい。ちょうどいいから俺も調理場に行こうとしたが、タバサと付き合いの長いキユルケはタバサの様子がいづもと違うことに気付いて聞いてきたが、言いふらして良いような内容じゃないので少しぼかして説明したが、キユルケもそのことは知っていたらしく納得してくれた。

タバサとキュルケと別れた後、いつものように夕食や風呂をすませて予定より早いけど瞑想とは名ばかりの苦痛に耐えていた。

「あら、酷いこと言うわね。これも私が一生懸命考えた精神を鍛えるための訓練よ」

「そんなこと…言ったって…この頭痛は…ないよ」

初めはリラックスした状態で自分の中に流れてる神剣の力を感じることだったのに、突然『護り』が起こした頭痛のせいで集中できなくて神剣の力をうまく感じられなくなっていた。

「この程度の頭痛で集中を乱すなんてまだまだよ。多少強引な気がしないでもないけど、これを乗り越えることができたら絶対に流の精神は強くなってるわよ。これでも威力は弱めてるから、後半分頑張れ」

容赦のない『護り』の言葉を聞きながらなんとかしようとするのが、結局この日は頭痛に耐えるのが精一杯で力を感じることは出来なかった。

第4話（後書き）

まず初めにFさん感想を書いてくださってありがとうございます。

前書きにも書きましたアンケートの内容ですが、視点変更がわかりづらいとの感想をいただいたので、そのことに関するアンケートを取ろうと思います。

第4話には、普段はオリ主視点ですが視点変更のときにSide○○といれてます。比較するためにプロローグから第3話までは変えずに今まで同じにしてあります。

そこで、視点変更の時にSide○○といれるかこれまでのように行間をあけるだけにするかを、感想に書いてもらいたいと思います。

期限は7月3日までにして4日にアンケートの結果を発表しようと思います。その後、視点変更に関する修正を加えていくつもりです。

次回も1カ月以内に投稿できるようにしたいと思いますので、これからもよろしく願います。

アンケートの結果発表

アンケートの結果発表

先週におこなったアンケートの結果を発表します。

アンケートの内容は視点変更の時に

Side と入れるか

改行するだけにするか

というものでした。

期限を7月3日までとしましたが、アンケートに答えてくれた人はこのアンケートをとるきっかけとなったFさん以外、だれもいませんでした。

ですので、Fさんの意見を聞き入れて視点変更の時にSide と入れることにしました。

これからも感想や誤字・脱字の指摘など、なにかありましたら書き込んでください。

これからも『新たなエトランジェ』をよろしくお願いします。

第5話（前書き）

こんにちは、六壬式盤です。

前回の4話を投稿してからちょうど1カ月の今日、ぎりぎりですが期限に間に合うことができました。

しかし、今回は7、8割書いたときにどうせならウェールズ皇太子に神剣を持たせて、神剣同士のバトルを書いてみよう等という突拍子もない行き当たりばったりな考えを実行しようとしたせいで、どこか中途半端に終わってしまっているのではないかと心配です。

第5話

タバサやコルベール先生に相談してから3日たった。相変わらず例の夢のせいで眠れないが、初めの頃のように跳び起きることはなくなってきた。

今日は先日の戦闘に勝利したお祭りということで、いつもより学園に人気がない。とはいっても、俺には対して関係がないのでいつものように『護り』を振っていると本を数冊持ったコルベール先生がやってきた。

「ここに居たんですね。ちょうどよかった探していたんですよ」

「コルベール先生。どうかしたんですか？」

「学園の図書室を調べたのですが、さすがに子供むけの本が見つからなかったんだが、教えながらすれば比較的覚えやすそうな本はあるってね。私も午後は仕事があるのだが、それまでは空いてるからナガレ君さえよかったらこれから教えてあげることができるがどうするかね？」

「是非、お願いします」

こつちから頼んでいることなんだから、まだ残っている分は午後にまわせばいい。

「そつえばナガレ君は祭りに行かないのかい？」

字を教えてもらうために俺が使っている部屋に向かう途中、コルベール先生はふと聴いてきた。

「場所を知らなかったり移動手段がなかったりと幾つか理由はあるんですが、パレードみたいに道を塞ぐ行事は動き辛くて嫌いなんです。才人に聞いたんですが、王都で一番広い道でも元の世界と比べると少し狭く感じたらしいので、そんなところでパレードをするなんて聞いたら行く気がなくなりました」

別に祭りが嫌いなわけではないけど、パレード等があるとそれを見に来た連中で道が塞がれて移動が辛いから、パレード系は嫌いだ。

「ほう。王都の大通りは馬車も通るからそこそこの広さだとは思っているのだが、君達の世界ではもっと広いのかね」

「場所によって広さも違いますけど、才人の居た場所と比べると2倍以上の差があるらしいです。まあ、才人が居たのは主要都市らしいので、すべての場所がそうだとはいいませんが」

俺は王都に行ったことがないから何とも言えないけど、才人はこっちに来る前は秋葉にいたらしいから狭く感じたんだと思う。

「なんと!?!? そこまで広い道があるのですか!?!? いやはや、そこまで広い道はなかなか想像ができませんね。もっと色々と聞いてみたいのですが、部屋に着いたようですよ、また別の機会にしましょう」

どうやらコルベール先生は俺たちの世界のことを興味があるみた

いだ。部屋に備え付けられている机にコルベール先生の持ってきた本に紙と筆をおいて隣り合うように座る。

「絵が多いものではないが、この本はけっこう人気があつてね。タイトルを『イーヴァルディの勇者』という物語だ。学園の本に訳を書きこむわけにもいかんから、紙と筆を用意した。わからない部分をそつちに書き写していけば時間がかかるかもしれないが、すぐ読めるようになるだろう」

「わざわざありがとうございます」

コルベール先生の気遣いには感謝しないとな。メモ用紙があるのとないのとじゃ覚えやすさが全然違う。

コルベール先生の教え方はとてもわかりやすく、あまり時間はなかつたけどだいたい三割ほどは覚えるかメモを取ることができた。

昼飯を食って残っていた訓練をこなした後は、コルベール先生が置いていってくれた本を覚えたての単語とメモを見て読んでみようとしたが、読める部分が断片すぎて逆にメモに書く単語が増えていくだけの結果に終わってしまった。

解説するつもりが逆にわけがわからなくなってしまった作業の手を止めて外を見ると、日が沈み始めていたので一旦ここで終えて飯を食いに行くことにした。

調理場に行くために外に出ると、ちょうど学園の入り口に止まっている馬車からルイズと才人がでてきた。

「よお。才人たちはパレードを見に行つてたのか？」

「ああ。しっかし今日はあのメガネのせいでえらい目にあつた」

「あの変に光るメガネか。けど、はずれたみたいでよかったじゃねえか」

今才人との話に出てくるメガネとは、今朝から才人がつけていた某ドリルが主武器の顔のでかい合体ロボットに出てくる鬼リーダーの機体がつけていたグラサンを、少し丸くした形で真ん中に赤い宝石、周りに小さな黄緑っぽい色の宝石を埋め込んだレンズの無い縁だけメガネだ。

どうゆう仕組みかはわからないけど、才人がルイズ以外の女の子に欲情すると宝石が光るらしく、そのたびにルイズの爆発が才人を襲った。まあ、途中からは女の子に目を向けただけで光ったりもしていたが、どうせルイズの爆発をくらすぎてどこか壊れたんだろう。しかし、あれだけの爆発をくらって才人は何故こうもピンピンしてるんだろうか？ 実はどこかに神剣でも隠し持っているんじゃないだろうか。

「それよりあの人誰？ 服装を見た感じ、馬車の手綱を持つことが仕事の人に見えないんだけど」

「あいつはアニエス。いろいろあって送ってもらったんだ」

「いろいろね。まあいいや。それより今から飯に行くが才人はどうする？」

「俺たちは向こうで食べてきたからいいよ」

才人との話が終わるときには、アニエスと呼ばれていた人はすでにいなくなっていたが、かわりにルイズと言う名の鬼がいた。才人もその

ことに気づいて何やら救いの眼差しを向けてくるが、巻き込まれたくないから見なかつたふりをして飯を食いに行く。

部屋に戻った後は、午前中のうちに解読できた部分をメモをなるべく見ずに読んで単語を覚えていくことにした。何度も同じ範囲を繰り返して読んでいく方法で進めていって、よく出てくる単語を1つ覚えることができたが結構時間もたってしまったので、今日はこれで終わっていつもの瞑想をしてから寝ることにした。

次の日、いつものように悪夢という名の目覚ましにたたき起こされた。それでも初めのころに比べると幾分か落ち着いてきたが。

顔を洗って部屋に戻ろうとしたとき、昨日才人とルイズの知り合いの確かアリエスだったかな？ その人がどこか急いでる様子で学園に来たと思ったら、走って女子塔の中に消えていった。たぶんルイズの部屋に向かったんだと思うけど、また何かトラブルでもあったのか？

「前の戦闘が終わったばかりだから、何かトラブルが起きてもおかしくないんじゃないの？ 確かにトラブルが起きたとして、あの2人のところに行く理由がわからないのはわかるけど、判断材料が足りないのだから考えても意味がないわよ。」

『護り』の言うように決めつけるのはよくないか。けど、昨日別れたばかりの相手がこんな朝早くに、しかも急いで来るなんてのはいかにも何か大変なことが起きましたって言ってるようなものだと思う。

トラブル云々は後で才人に聞く事にして、コルベール先生に今日の予定を聞きに行こう。あらかじめ空いてる時間がわかったほうが、

今日の予定を立てやすい。そう思ってコルベール先生を探して、零戦を整備している先生を見つけたのだが

「まだ、修理の途中なんだがね」

「飛びりやいいですから。あ、そうだ。コルベール先生例の物は」

「あ？ ああ。火薬を使った加速装置なら取り付けてあるよ。これで短い滑走距離でも離陸できるはずだ。しかし」

そう。コルベール先生に予定を聞こうと思ったら、才人とルイズが来て突然零戦を飛ばすと言ってきた。先生はなんとか止めるように言おうとしてるのだが

「もう！ のんきにお喋りしてる場合じゃないでしょ！ 姫様が危ないのよ！ アニエスに早く追いつかなきゃ！」

「お、おう。じゃあ先生行ってきます」

2人は聞かずに零戦を飛ばしてどこかに行ってしまった。しかも離陸時に学園を囲む壁の一部を壊して。

「あゝあ行ってしまった。ほんとに大丈夫かね」

「見た感じ普通に飛べてるみたいですけど、なにが心配なんですか？」

遠目に見る感じでは普通に飛べてるようだったから、コルベール先生が何を不安に思っているのかわからず聞いてみた。

「飛べるには飛べるんだが……修理に使う部品がこんなに余ってるんだよ」

困った顔をしながら足元を見ていたのでその場所を見ると、そこには機械部品が幾つも転がっていた。しかも、専門知識のない俺でも転がっている部品の幾つかはエンジン部分に使用すると思われる物まであって、コルベール先生が心配する理由がわかった。

そうやって才人たちに追いかけてようか考えてると、零戦の音を聞いて来たのかタバサとキュルケが広場に出てきた。

タバサを見てシルフィードのことを思い出した俺は、タバサに頼んで連れて行ってもらえないかを頼んでみようと思いい人に近づいていった。

「タバサ。実は才人のやつが修理の途中で零戦を飛ばしてしまったんだが、途中で事故がおこる可能性があるからシルフィードで才人のとこまで連れて行ってくれないか？　なんかトラブルでもあったのか、コルベール先生の話の聞かずに飛んでいったから心配なんだ」

「……わかった」

「それで何か事件があったって言ってたけど、ナガレは何か知らないの？」

シルフィードに乗って零戦を追いかけてる途中で、何故かついて来たキュルケが今回のことについて聞いて来た。

「俺は何も知らない。ただ、今朝がた兵士に似た格好をした女性が

急いだ様子で2人の所に来たから、2人の知り合いに何かあったんだと思う」

キュルケの質問に答えながら零戦の方を見る。零戦には未だ追いつけていないが、やはりエンジンの調子がよくないようで徐々にではあるが距離は縮まっている。

「それよりなんかふらふらしてるけど、サイトは大丈夫なの？」

「……もつと速く」

キュルケが零戦の様子を見て不安そうにしている、タバサも不安になったのか簡潔にシルフィードに速度を上げるように指示する。その指示に対してシルフィードは1鳴きすると、ぐんぐんと速度を上げて零戦との距離を縮めていった。

Side 才人

アニエスに姫さんが攫われたことを聞いた俺たちは、コルベール先生に無理言ってラグドリアン湖に零戦を飛ばしている。

「なあルイズ。やっぱり流にも来てもらったほうがよかつたんじゃないか？」

「あんた何言ってるのよ！ これは極秘任務なのよ！ 女王陛下が攫われたってことは、相手は凄腕のメイジかも知れないのよ！ いくら剣を持っているからって、足手まといになるだけよ！」

流の力を知ってる俺としては流にも手伝ってもらいたかったが、

流の力を知らないルイズの言いたいことはわかるけど、オーク鬼の攻撃をびくともしない盾や結構離れた距離を一息で跳んでくることができるとをすれば、ルイズのことだから何でそのことを言わなかったのよ！　なんて顔を真っ赤にしながら怒るんだろうな。

「それよりもっとスピードでないの？」

「おかしいな？　エンジンの調子でも悪いのか？」

初めてこいつを飛ばしたときはもっとスピードがでてたはずなんだけどな。それに、機体が安定しないで左右にふらふら傾いてる。そんなことを考えてると、突然エンジンが軽く破裂して機体が落ちかけた。

「ちよっと、ちゃんと操縦しなさいよ！」

ルイズが文句を言ってきてるが、今は返事してる余裕がねえ。

今の状況はかなりやばい。機体はなんとか持ち直したけど、左右の揺れが大きくなってると、エンジン部からは煙まで出てきやがった。

「やばい、墜落するかも」

「墜落ってどうゆうことよ！」

つい口からでた独り言は近くにいたルイズにも聞こえたようで、怒鳴りながら説明を求めてくる。

「つまりだ」

あまり言いたくはないけど、怒鳴り続けられるよりはましだと思

って墜落の説明をしようとした瞬間、まるで計ったかのようなタイミングでエンジンが止まった。

「こつゆつことだよ」

「ええええええええ！？ ……ばかあああ！！」

止まったエンジンを見て状況を理解してくれたルイズの聲が、どんどん高度を下げる零戦から響いてくる。

「もう！ サイトのバカ、バカ、バカ！ どうしてくれんのよ！
姫様を助けなきゃなんないのに！」

「痛つ。だあ、殴るな。落ち着け。なんとか着陸させるから」

なんとか無事に着陸させようとするけど、ルイズが暴るせいでまともに操縦できずにどんどん落ちていく

「きゃあああああ！！」

「うわあああああ！！」

S i d e o u t

速度を上げたシルフィードが、もうすこしで零戦に追いつこうとしたとき、煙を上げていたエンジンが止まって墜落し始めた。

「シルフィード！」

タバサの掛け声でシルフィードが零戦を追いかけて降下する。墜落する零戦のすぐ近くまで追いつくと、タバサが風の魔法を使って零戦の墜落を止めた。才人とルイズは何が起きたのか不思議そうにしている、シルフィードが横に並んだことで漸くこっちに気付いた。

「はあゝい、ダーリン。あなたのキュルケ到着」

こっちに気付いた2人というか才人に向かって、投げキッスをしながらキュルケが話しかけてるけど、キュルケはただついて来ただけで何もしてないよな。まあ、タバサと2人きりだと静かすぎてなんともいえない空気になるから、その点でいえば助かってる。

「あんたたち何しに来たのよ！」

「ちよつと！ 助けてもらってその言い方はないんじゃないの！」

キュルケは何もしてないけどキュルケの言う通りだと思う。っていつかルイズはさつき墜落しかけたことを忘れてるのだろうか？ それとも単にキュルケがいたからかみついただけなんだろうか？ ……お礼を言ってきた才人を殴ったから多分後者だろう。

「ねえ、これは秘密の任務なの！ ついてこないで！」

「…………ふふっ。そんなこと聞いたら、なおさらついて行きたくなっちゃうじゃない」

「あのね！」

朝、慌ただしかったのはそれでか。っていつかルイズよ。秘密の任務なんてばらしたら、秘密じゃなくなるってことわかってるのか

？ それに、今の状態でタバサの魔法が解けたらエンジンの止まってる零戦は、再び地面まで一直線に墜ちていくってことわかってないんだろうな。わかってたらそんなこと言うはずがない。

「……下」

いきなりのタバサの呟きに吃驚しながらも、下を見ると白い馬に乗った金髪で青い服を着た多分男と、紫のマントで頭に冠を乗せた女性が見えた。神剣の加護で視力も上がってるから、遠くを見るとき等でとても助かってる。

才人達の任務が何なのかは知らないけど、状況からしてあの2人だろう。現に才人は零戦のエンジンを掛け直してる。どうするつもりか聞いたら、馬の前を横切って脅かすつもりらしい。

才人の考えはうまくいった。エンジンが掛った零戦が森が途切れ湖に出たところを横切ると、馬が驚いて暴れ始めた。

「姫様！ ご無事ですか！」

女性の方はこの国の姫だったらしいが、湖に着水した零戦からルイズが声を掛けるけど返事はなかった。男が姫を連れて移動しようとするが、その前にシルフィードから降りた俺たち3人で道を塞ぐ。

「いかせない」

「ごめんあそばせ。って、まさかアンリエッタ女王陛下!？」

女王？ ルイズが姫って言ってたからお姫様かと思ってただけ

ど違うのか？ まあ、どっちにしるルイズ達が追いかけてたのが、この人だつてことには変わりないからどっちでもいいけど。後はもう1人の男のほうだけど誰だ？ 改めて追いかけていた相手を見てみると、怪しかった雲域だったがとうとう雨が降り出してきた。

「流、気を付けて。あの男、神剣を持ってるわ」

（神剣って本当か！）

「ええ。私たち神剣は、お互いの気配を感じ取ることができるの。手配を感じ取れる範囲はある程度変えることもできるんだけど、そうすると相手にも私たちのことがばれてしまうの。だから、今まで感知できる範囲を狭めていたんだの。それに、あの神剣自体の気配が希薄なせいもあってここまで近づくまで気がつかなかったのよ。流も剣の気配はわかるはずよ、何か感じない？」

確かにうまく表現はできないけど、頭の中にあるリーダーに神剣の反応がどこにあるのかが、うかんでくるようなこないような微妙な感覚をさつきから感じてる。

タバサが出した複数の氷柱が男を貫いた。あまりに突然のことで何の反応もできなかったが、たった今タバサの魔法によって貫かれた傷が、まるでビデオの逆再生を見ているかのように塞がっていく光景に言葉を失った。

（『護り』、神剣の力はこんなこともできるのか！？）

「普通は不可能よ。例外はあるかもしれないけど少なくとも私にはあんなことはできないわ。ただ、気になるのは今の現象にマナの動きが見られないのよ」

今起こったことに関して神剣の力が原因かと思っただが、どうやら違うらしい。けど、神剣の力じゃないのなら何であの男は行きてんの？ 身体に穴が開いたのに、それが何事もなかったかのように塞がるなんて信じられない。

「だったら、これならどう!」

神剣じゃないのなら何なのかを『護り』と考えようとしたとき、キルケが炎のタバサが風の魔法を使って攻撃を仕掛けた。タバサの風で火力が上がった炎が男を飲み込んだように見えたが、炎が消えると両手を前に出した状態で男は無傷で立っていた。

「今度はこちらの番だ!」

炎が止むと男はになって杖をこっちに向けてきた。俺はすぐ2人の前に出ていつ魔法が打たれても対処できるように、オーラフォトンシールドを張って身構える。オーラフォトンシールドを張ってすぐに、何かがぶつかってきたが揺らぐことなく防ぎきる。

「なんだと!?!」

男の攻撃を防いだことで男と女王様、それと初めて俺の力を見たルイズが驚いている。

「この国のトップに力を見せてよかったの?」

(防がないとこっちが危なかったと思うし、俺が周りと違う力を使うってことはばれてるんだし大丈夫だろ)

「確かに力を使う者がいるってことは知られてるけど、それが流だつてことは知れてなかったと思うわよ」

え〜っと、どうしよう。てっきり俺のことはばれてると思ってたけど、もし『護り』の言ったことが本当なら、自分から正体を国のトップにばらしたってことだよな。ミスったかな。

「姫様！ 今のご覧になったでしょ！ それは偽りのウエールズ様なんです」

『護り』と話していると、いち早く我を取り戻したルイズが女王に声をかける。それにしてもあのウエールズって言う男が様付けで呼ばれてるのは何でだ？

「いいえ、いいえ！ そんなはずないわ。私を、このアンリエッタを永遠に愛してくださいと」と

「騙されてはだめです」

ルイズが呼びかけるが女王が返してきたのはルイズの呼びかけを拒否する言葉だった。

俺は何故拒否するのか理解ができなかった。さっきの出来事を見たら、この男が何かおかしいことは一目瞭然のはずなのに、なんでこの人はそのことを受け入れないんだ？

「ルイズ！ あなたは本気で誰かを愛したことはある！ 本気で愛してるなら、なにかも捨ててその人についていきたいと思うものよ！ だからどうか行かせて！ ルイズ！」

「いいえ。……お願い姫様。目を覚まして！」

ルイズの呼びかけを否定した女王が逆にルイズに向けて叫ぶが、俺にはその叫びはただ自分の考えを押し付けているだけの我儘にか聞こえなかった。

別にこの人が誰を好きになろうと俺には関係がないことで、その人の自由だと思うけど、この人は国のトップだ。そんな人が後先何も考えずに、その場の勢いと自分の我儘で国を捨てようとするのは間違ってると思う。

「これは女王の命令よ。ルイズ・フランソワズ。私の、貴方に対する最後の命令よ。道を開けて頂戴！」

ルイズが何を言っても引く気がないことがわかったのが、まるで友人に頼みごとをするかのような言い方が、女王としての命令でルイズに道を開けさせようとしてきた。

それを聞いた俺は頭にきていた。確かに、俺らとたいして変わらない歳で一国のトップに立つのは、いろいろと苦労することがあるだろうし、想像できねえけど仮に逆の立場だったとしたら同じことをしないとも言い切れない。

けれど、女王であることを放棄してこの男に付いたくせに、自分の思い通りにならなくなると女王としての立場を再び利用するとかふざけるなと言いたい。

「寝言は寝てから言えよ。そんなのは愛でもなんでもねえだろ！」

俺と同じように、女王の命令に対して何か思うところがあったのか、さっきまで黙っていた才人が言い返した。

「サイトさん、どいてください。もう決めたのです。私は、ウェールズ様について行くと」

「どうしても行ってくつて言うのなら、俺が止めてやる！」

それでも、考えを変えない女王を見て言っても無駄と思ったのか、才人はデルフを構えて突っ込んだ。それを見たウェールズが魔法を放ったが、才人はそれをデルフで切り裂いてさらに距離を詰めようとした。けれど、女王の地面から氷の壁を出す魔法に阻まれてしまった。ご丁寧なことに氷の壁は、俺たちのいた方向にも張られていて、横からの攻めもしっかり警戒していた。

「ウェールズ様には指一本触れさせないわ。お願い、私の邪魔をしないで！ …… ルイズ、お願いだから手を引いて」

「そつだ。そうした方がいい。僕たちはここを通りたいだけなんだ」

寒さからなのか、友人に杖を向けたためなのかわからないが、女王は震えながらもウェールズを守ろうと杖を構えていた。そんな女王の手にウェールズが手を添えて杖を構えなおすと、杖の先に付いている宝石が輝き2人と氷壁の間に螺旋を描いて空を昇っていく水が2つ現れた。

「水のトライアングルには風のトライアングルを！」

ウェールズがその言葉と共に杖を現れた2つの水に向けると、風が周りを渦巻きたちまちそれは人が3人ほどの高さをもつ小型の竜巻になり、氷壁を砕いて才人たちの方と俺たちの方にそれぞれ向かってきた。

「タバサ、キュルケ！ 俺の後ろに！ マナよ。神剣の主として命じる。オーラとなりて我らを護る強固な盾となれ。オーラフォトンシールド！」

竜巻が向かってくるのを見た俺は、2人を後ろに下がらせて普段より2倍ほど大きいシールドで竜巻を受け止めた。ホントなら詠唱無しでも張れるけど、声に出した方がイメージがしやすくシールドの効果が高くなるから、後ろに被害が行かないように大きめにシールドを張った。

「くそっ！ このままじゃ、抑え切れねえ！」

才人はデルフを竜巻に押し当てて防いでいるが、竜巻の方が力が強く今は持ち堪えているが、何度かデルフが弾かれそうだった。

「選ばれし王家の血のみに許されるヘキサゴンマジック。誰にも僕達を止めることはできない」

才人が心配ではあるが、こっちも迂闊に動けなくなっていた。シールドは竜巻を完璧に防いでいるが、俺は神剣魔法を複数同時展開ができないし、シールドを張っている状態のまま移動するなんてことも出来ないためこの場を動けずにいた。

タバサやキュルケが、俺が竜巻を抑えている間に才人の援護がウエルズに攻撃をしてもらおうと思ったが、2人の魔法は力負けして竜巻に通用せず、ウエルズを攻撃しようと思っても俺が防いでる竜巻は才人の所より大きく、回り込もうとしている間に2人のどちらかに見つかってしまう。

「ウル・スリザース・アン・スールキン・キョウ・フウ・ニード・

ナウシズ・ヘイロズ・ヤラ・デルテオ・イス！」

どうすればいいのか考えていると、ルイズが何かの本を見ながら呪文らしきものを唱えているが聞こえた。ルイズが呪文を唱え終わると、ルイズの持っていた本から光が一直線に空に上がり、次の瞬間にはウエールズの真上から雷がウエールズに落ちた。

「うわあああああああああ！！！」

雷に撃たれたウエールズが倒れると同時に竜巻は胡散するように消え、先程まで振っていた雨もやんでいた。

Side 才人

ルイズの魔法をくらって倒れたウエールズ皇太子と、さっきまで必死になって抑えていた竜巻が無くなったのを見て疲労と安心感から少しの間その場でぼーっとしてたけど、姫さんが皇太子の傍に行くのを見てみんな皇太子の傍に向かって行く。もちろん俺も。

皇太子のすぐ傍にいた姫さんは泣きながら倒れた皇太子を抱いていた。姫さんの次に近くにいた俺とルイズ、キュルケとタバサも集まって最後に流も集まってきた、俺よりも大きい竜巻を受け止めていた流に無事かどうか聞こうと流の方を見たとき。

「ぎゃあー！」

姫さんの悲鳴が聞こえて振り向くと、姫様は尻もちをついていてさっきまで姫様が抱えていたウエールズ皇太子の姿が無く、それを見るとほぼ同時に、

ザシュツ！！

何かを貫くような音が聞こえ音の聞こえた方を見ると、タツクル
をしているような体制で流にくつついていて皇太子と、驚愕した表
情を浮かべた流がいて、流の右側の背中から真っ赤な血に染まった
レイピアの先が見えていた。

S i d e o u t

第5話（後書き）

この作品を読み続けていただいております。

次回で神剣同士のバトルに始まりませんが、行き当たりばったりな考え+よく考えればまともな戦闘シーンを今まで書いていない。ということにいまさらながら気がついたので、うまく描けるか不安ですが頑張って書いていくつもりです。

余談ですが、どなたか「あ」に「？」をつける方法を知りませんか？

ウェールズがルイズのデイスペルマジックを食らった時の叫びの後半に使おうとしたのですが記入の仕方がわからず普通の「あ」をつかいました。知っている人がいれば是非教えてください。

その他、感想・誤字・脱字等、何かありましたら是非とも書いてください。

これからも「新たなエトランジェ」をよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9956q/>

新たなるエトランジェ

2011年7月28日01時43分発行